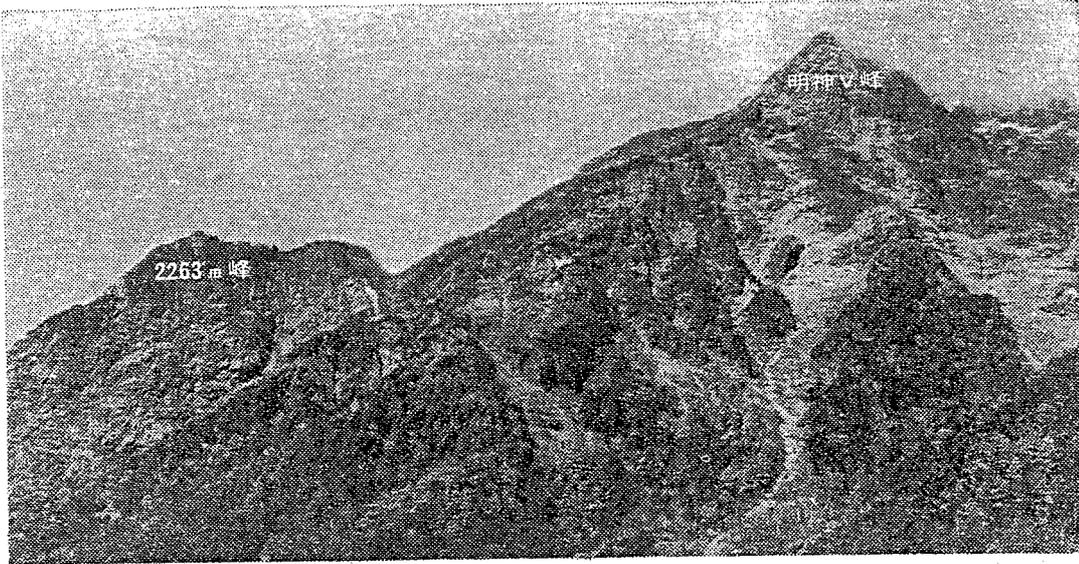


# ルート開拓の概要

登攀倶楽部・岐阜



## 【はじめに】

不遇の山という表現で呼ばれる山はいろいろあるが、穂高岳の華やかな存在と比べた時、明神岳はまさにそんな感じがピッタリする山である。

上高地からは最も近い位置にあり、しかも二二六三峰から主峰に至る間に広がる岩場は、いずれもスケール、困難さという点で穂高の各岩場に比して、勝るとも劣らない素晴らしさを持っている。にもかかわらず登攀の対象とされることは稀である。

その理由は大方のクライマーが持っている先入観、明神の岩は脆くて草付が多いということに起因していると考えられるが、実際にはごく一部のルートに当てはまるのみで、全体的には滝谷の各ルートと比較しても、特別に明神の方が脆いということはない。ただ、登攀者の絶対数が少ないために、残置ハーケンがあまりなく、その分だけルートファインディングが難しいことや、逆層の岩質と相まって既成のハーケン、ボルトの連打されたルートを登り慣れた人にとっては嫌な岩場という感じはするだろう。

私達はこの難しさと嫌らしさを合わせ持った明神岳を集中的に登り始めて七年ほどになるが、この山の不思議な魅力に取りつかれて、今では最も好きな岩場の一つになっている。ここは登り尽くされ

た穂高の各岩場と違って、ルート開拓の魅力に満ちあふれているし、フリー主体の逆層の岩場は攀じる楽しみを充分に与えてくれる。

特に冬季登攀の困難性はわれわれが経験した日本の岩場の中では最高のものがあり、穂高にはもう登るルートがないとか、冬季の滝谷や奥又こそが穂高の最高の登攀対象であると考えている人々に、是非登っていただきたい岩場である。

## 【地形とその概念】

明神岳の主稜線は前穂高岳から南へ続く五峰に至るまでを指し、二二六三峰は五峰から派生する支尾根と言った感じである。主稜線には主峰から南へ二峰、三峰、四峰、五峰と並び、五峰頂上からさらに南へ下った位置に二二六三峰に至る尾根が梓川に向かって落ちていく。そして主峰と二二六三峰を挟んで東面には下又白谷とS字ルンゼ、西面の岳沢側には奥明神沢と前明神沢があり、斜度は梓川に面した東面がきつく、かなりスケールの大きな岩場を構成している。

岩質は安山岩質で、五峰などは風化作用が著しく、部分的には自然崩壊を起こしている所もある。東面の各岩場はすべて逆層を呈している。登攀にはより一層の困難さを提供している。また岩質の固さという点では二二六三峰が全般的に固く、中でも南壁と東壁の右フェイスな



明神岳ルート開拓史（東面）〈表一〉

山城	ルート名	完登年月日	パーティ	備考
2 2 6 3 峰	東壁ノーマルルート	1951. 8. 19	日 嶺-奥山章、三浦堅太郎、吉田学	東壁初登
	正面ルート	1974. 7. 19	※ 木村智、平松義範	
	中央リッジ	1974. 7. 20	※ 宇都宮行志、桜井宮雄	
	左フェイス	1975. 8. 30	※ 木村智、宮本武敏	
	南壁岩稜会ルート	1961. 10. 7	岩稜会-毛塚雄一、長谷川光男、湯浅美仁、川尻克義	南壁初登
	大ハングルート	1970. 8. 29	※ 沼田慎造、太田忠男	
	西壁S字ルンゼ	1923. 7. 29	慶 大-青木勝、中村邦之助(松井憲三)	初のパリエーションルート
	三フェイス	1976. 7. 19	※ 木村智、成瀬一基	
	東南稜	1932. 7. 31	東 大-窪田庄十郎	
	南 壁	1957. 9. 24	日嶺/東雲-奥山章、岡田立彦、大西嘉彦/堀仁、太田ゆきみ、西牧康	下宮川から取りつく
5 峰	東南カンテ	1975. 11. 3	※ 木村智、宮本武敏、宇都宮行志	中央フェイスと南壁間のカンテ
	東壁中央フェイス(赤壁)	1960. 10. 10	岩稜会-石原国利、高井利恭、毛塚一雄、川尻克義	
	# (東雲ルート)	1953. 7. 26	東 雲-大高俊直、柴垣安弘	
	# (日嶺ルート)	1956. 8. 15	日 嶺-奥山章、吉沢勘一郎、大江幸雄	
	# (信大ルート)	1952. 7. 9	信 大-小松英夫、畑中滋光	中央フェイス初登
	東壁中央稜	1941. 7. 25	東 大-佐谷健吉、山崎春成	
	# 中央リッパ	1932. 7. 31	東 大-小川登喜男、国垣研二郎、三輪俊一、桑田英二	中央リッパより移る
	# 中央リッパ	1949. 7. 24	岩稜会-松田武雄、本田善郎、石原一郎、室敏弥	完全初トレース
	中央ルンゼ奥壁(右岩溝)	1962. 10. 1	日立造船-峯松俊彦、則包良夫	
	# (メガハングダイレクトルート)	1970. 5. 3	※ 望月忠(単独)	単独ルート開拓
4 峰	東北稜	1948. 8. 3	浪 高-佐谷健吉、徳永篤司	
	東 稜		不 明	
	東北稜	1954. 8. 10	東 雲-大高俊直(単独)	
3 峰	3峰バットレス		不 明	
	東 稜		不 明	
2 峰	2峰バットレス	1956. 8. 16	東 雲-大高俊直(単独)	
	東 稜	1956. 7. 22	東 雲-亀岡隆志、小林靖彦他	
主 峰	東 稜	1931. 7. 29	京医大-谷博(単独)	
	主稜線	1926. 7. 31	早 大-四谷電胤、鈴木勇、広瀬忠三	5峰~主峰-前穂縦走

注(1) ※印は登山倶楽部岐阜の記録。  
 (2) 初期の記録、諏訪多氏の穂高岳登山史による。  
 (3) 日嶺-日本山嶺倶楽部、東雲-東雲山溪会

に出る。バットレスは二P程度で短い、正面は岩が固くて快適である。二峰にもやはり東稜、バットレスと呼ばれる岩場があり、それも頂上直下に存在する。東稜の取付は四峰東北稜の末端壁から二〇〇mほど主峯東稜寄りに登ったところで、脆いカンテ状の岩場から始まる。中間のナイフエッジは冬季には素晴しい雪稜となる。なおこの尾根は頂上へ突き上げているのではなく、三峰寄りの主稜線で終わっている。バットレスはやや主峯東稜側に向かって切れ落ちていくが、スケールは三峰バットレスとほぼ同程度である。

主峯には穂高の中でも屈指の古典的ルートである東稜と、頂上から下又白谷側に主峯バットレスと呼ばれる草付混じりの雑然とした感じの岩場がある。東稜は冬季の名ルートで、明神岳東面の代表的ルートで、通常はひょうたん池から上部が登攀対象になっている。

主峯バットレスはアプロチが不便なことや、あまりスキリシた岩場ではないことなどから訪れる人は少ないようであるが、完全にトレースしようと思ったら東稜からドラバースして上部だけ登るのではなく、下又白谷から取りつかなくてはならない。

明神主稜線は通常五

戦後は学生から社会人へと主役が移り、

〔開拓史〕

明神岳の初期の開拓史は穂高の他の岩場と同じく学生山岳部の独壇場であった。諏訪多栄蔵氏の穂高岳登山史抄によれば、初登頂は一九一一年七月二十五日の小島鳥水らで、この時はワサビ沢から五峯に達し、さらに主稜を前穂まで縦走して帰路を明神主峯から上宮川に取っている。その後、一九二三年に慶大パーティが初めてのパリエーションルートとして二二六三峰S字ルンゼの登攀に成功し、続いて京都医大の谷氏による主峯東稜が一九三一年に、翌一九三二年には戦前における最も困難で、本格的なクライミングルートである五峰東壁中央リッパから上部は中央リッパに移った登攀が、岩登りの天才といわれた東大・小川登喜男氏他のパーティによって完成された。戦前の主な記録としては以上の他に、五峰東南稜と東壁中央稜を東大パーティが登り、東農大と早大パーティによって冬季の主峯東稜が登られた。



冬季初攀史 (東面) <表-2>

山域	ルート名	登攀年月日	パーティ	備考
2263 北峰	東壁正面ルート	1976.2.13~14	* 木村智、安井潤一、下戸友二	
	南壁	1961.3.4~5	高嶺山岳会一大谷計介、加藤正徳	詳細不明
	南壁岩稜会ルート	1963.3.22~23	岩稜会一高井利恭、湯浅美仁、浅野孝	
	西壁S字ルート	1976.2.13	* 木村智、安井潤一、下戸友二	
5 峰	東南稜		不明	
	南壁	1961.3.24~25	名古屋山岳会一加藤幸彦、加藤英生	
	東壁中央フェイス	1959.3.4~6	日本RCC一奥村謙、榎葉一男、加藤正男、住良三、加藤均	途中から中央稜へ
	(赤壁)	1961.3.23~25	岩稜会一高井利恭、森泰造、毛塚一雄、石原国利	
	(東雲ルート)	1972.1.1~2	* 望月忠、岩間袈裟己、川島繁男	東雲ルート完全トレース
	中央稜	1959.1.3~4	名古屋山岳会一加藤幸彦、前園陽太郎	
	中央リンネ	1957.1.4~6	東雲山溪会一大高俊直、亀岡隆志、古田徹、有賀浩	
	東北稜	1972.1.4~5	* 下坂信夫、岡本幸彦(京都)	
4 峰 主峰	4峰東稜	1956.1.4	東雲山溪会一吉田徹、小川章	
	2峰東稜	1969.12.29~31	北斗山岳会一山崎金一、鎌田邦太	
	主峰東稜	1936.12.16	東農大一竹本省三、反町慎一	

注 (1) 上記の他に、ワサビ沢、2峰側稜、2263北峰東南稜が登られている。  
 (2) \*印は登攀倶楽部岐阜の記録。

困難を感じさせるルートが多く、ピッチの長さとフリークライミングが主体という性格を併せて考えると、穂高の中でも屈指の冬の岩場ということができる。

五峰は歴史が古いだけに最もよく登られている。名古屋山岳会が南壁と中央稜、東雲が中央リンネ、岩稜会が中央フェイス(赤壁)、日本RCCが同じく中央フェイス、われわれ

が五峰東北稜と中央フェイス(東雲正規ルート)を登っている。今後の登攀が期待されるのは明神岳最大のスケールを持つ東南カンテ、中央リンゼ奥壁(メカネハンクダイレクトルート、右岩溝ルート)などである。四峰から主峰に至る間に展開する各稜は、二峰と三峰のバットレスと四峰東北稜を除いては登られているようである。各稜中で最も登りやすいのは四峰東北稜と二峰東稜であるか。ここは素晴らしい雪稜登攀を味わえる。参考までに現在までに登られた各

「われわれの研究成果」

ルートをとめてみた(表2)が、未発表の記録についてはこの限りでない。

われわれが明神岳に取り組んで七年余りになるが、この間に二回のヒマラヤ遠征や、国内では錫杖岳、剣岳といった他の目標もあって、必ずしも所期の目標を果たしたとはいえない。引き続き明神岳と取り組み、穂高の中で最も処女性を残している明神岳に、新ルート開拓の可能性を求めていきたい。その半面、知らざる岩場を紹介することに抵抗感があるのは「われわれの岩場」でなくなってしまうという恐れがあるからだろうか。

われわれの記録には別表1、2に掲げたルート開拓七本、冬季初登四ルートの他に次のような登攀がある。

冬季 五峰東壁中央リンネ(三登)、五峰東南稜前穂Dフェイス、北尾根下降、主峰東稜、前明神沢五峰主峰前穂奥穂。

夏季 二二三三峰S字リンゼ、五峰南壁(トラバースルート)、五峰東壁中央フェイス(赤壁)、五峰東壁中央フェイス(東雲ルート)、五峰東壁中央リンネ、四峰東稜、四峰東北稜、三峰東稜、二峰東稜、主峰東稜、主稜線。

以上が主だったものであるが、岩壁のルートはいずれも複数パーティによって登られている。(文責・木村智)

**スノーライフを楽しむ'78**

クロスカンリースキー ツーリングセット 板、靴、縮具、ポール ¥19,800~¥29,500	雪のハイキング スノーシューイング ケベックスノーシュー 5タイプ パーメントデュプス 3タイプ シェルバテザイン ビックフィット 世界の.....セーター
80年の伝統.....フィルゾン	カウチンセーター ヒマヤンセーター ピーターズチームオールドセーター グリニックスセーター

軽量 山スキー オリジナル Schläfer ¥15,000

**Tamaki sports** 神田駅西口直前 ☎03(252)9241  
アウトドア用品プライスリスト送ります。(要50円切手同封)  
東京都千代田区内神田3-12-9 タマキスポーツ宛

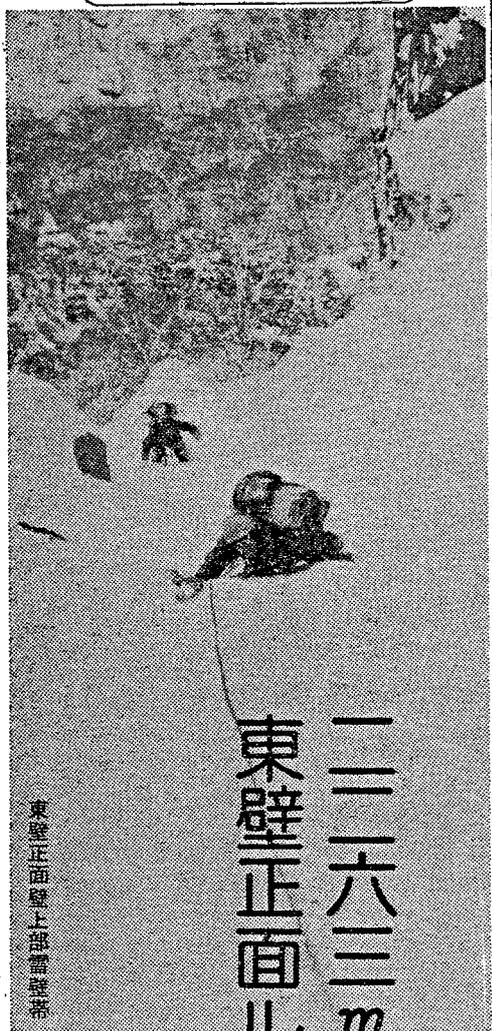
— 会員募集 —

**N.C.C**

(ニュー・クライマーズ・クラブ)

\* 沢、岩、氷壁を主体としたクラブです。  
\* 国内を初め海外の困難な山を目標に山行を続けています。

~連絡先~ TEL (昼) (930) 79777 小島  
(昼) (535) 41111 内972 植村  
〒114 北区上十条1の19の8第2佐久間荘  
福島 比佐雄



東壁正面壁上部雪蓋帯

# 一二二六三〇峰西壁S字ルンゼ 東壁正面ルート冬季初登攀

登攀倶楽部・岐阜

## 「はじめに」

一二二六三〇峰周辺の概要については前号(新年号)で説明したが、この東壁は一九七五年二月初登を狙ってアタックし、二P目の登攀に二人で三時間も費やしてしまい、とても一日で完登できる見込みが立たずあえなく敗退してしまった。そこで今年是最初からビバーク一回の予定で再度アタックすることとし、まだ記録の見られないS字ルンゼとの継続登攀を合わせて考えた。

以下は一九七六年二月十二日～十四日にかけてアタックした、明神岳における継続初登攀の記録である。

## 西壁S字ルンゼ

一九七六年二月十二日 パーティ員 村智、安井潤一、下戸友二

十二日 S字ルンゼ出合のビバーク地点から、森林帯を進み、途中から沢に入ると膝ぐらいのラッセルとなった。数回トップを交替して、ラッセルを繰り返して、西壁直下まで来ると傾斜はしだいに急になり、ときおり氷が現れ始めた。夏季であればこのあたりは快適なスラブ滝になっていると思われるが、今はただ急峻な雪壁だ。

S字の中心部付近に来たと思われるころ、両側の岩壁が迫って廊下状となり、右へ大きくカーブすると、突然、氷滝を

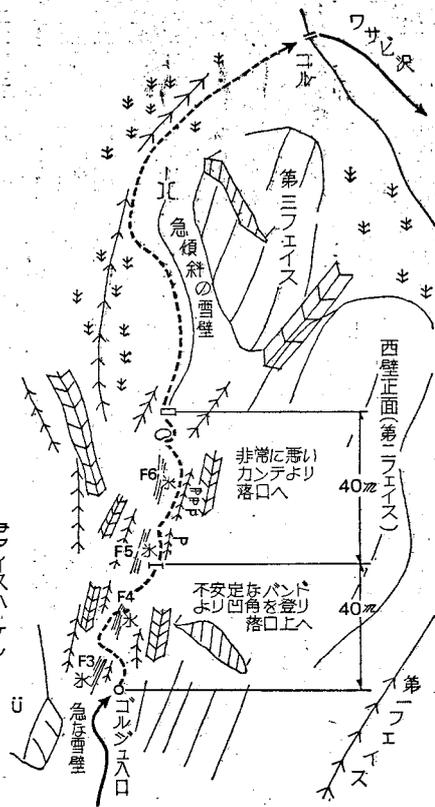
伴った岩壁に阻まれた。ここで登攀具を出し、スタカット登攀の準備を行う。

一P目、右上へ岩と雪とのコンタクトラインを進み、詰まったところから左へ不安定な雪のバンドを伝って落口の上に出る。そこからは左壁にそって凹角をズリ上がり、出口から落ち口上を右へカッピングし、トラバース気味に越えてからビレイする。二P目、滝の真上は氷がハングしていて難しそうである。右手のコンテ状の部分にルートをとる。ところがここも中間で行き詰まり、二度、三度と登ったり降りたりして、ようやく最後はアイスハーケンを草付に打って突破する。そこから左上へ登ってルンゼの芯に戻る。ここで一呼吸入れてハーケンを打ち、さらに傾斜の強そうな上部を見ると、

氷のチムニーができていて直登は不可能と思われる、ここもやはり右手のコンテ状のところをルートに選ぶ。カンテは下と同じように外傾していて悪く、効かないハーケンを連打、アプミを使用してようやく越えた。この滝を抜けると急にルンゼは拡がっており、急な雪壁をしばらくコンティニューアスで進みその後ザイルを収納する。

ルンゼの源頭は二〇分ぐらいのチムニー滝となっていたが、これは登れそうもないのであつさり左のブッシュ帯に入り、不安定な雪をラッセルして稜線に出る。このコルで大休止後、ワサビ沢を尻セードで飛ばし、途中から小さな尾根を右へ横断して東壁基部に着き雪洞を掘る。S字ルンゼの核心部は二Pだけであつ

S字ルンゼ上部冬季ルート図



だが、なかなか困難で約四時間をこのピッチで費やした。今後のルートとしてはここをアプローチとして、西壁や五峯に出るルートとして考えると面白い登攀になるだろう。

〔タイム〕ピバーク地点発(五・〇〇)ゴヤシュ帯入口着(九・〇〇)稜線着(一五・〇〇)東壁基部着(二六・〇〇)

東壁正面ルート

一九七六年二月十三日、十四日、パティ、田本村、安井潤一、下戸友二

十三日(晴のち曇) 取付点の雪洞を出て、登攀準備をしながら壁を見ると、朝のやわらかい光を受けてキラキラと光る。前年の苦い思いが脳裏をかすめ、今回は

是非でも登るんだと自分自身にいい聞かせてゆっくりとザイルを結ぶ。

一P目、夏のルートである凹角を避け、右手の不安定で急な雪壁をだましながら登り、四〇がでブッシュに着いてビレイ。

二P目、左上へ切れ切りのバンドを微妙なバランスで登るとフェイスがあり、これを人工で一〇が登る。出口の凹状部は氷に覆われていてそれを叩き割ってハ

ーケンを掘り出し、アプミを吊って小さな外傾バンドに立つ。ここで先端が五、ぐらいしが入らないハークンを打ち、これをホールドにして上の残置ハークンにアプミを吊り、カンテに出た。この部分

は何度登っても決断力を要求される。夏はここから上はすべてフリークライミングだが、現在は非常に悪く途中でハ

ークンを二本打ち足した。三五がでようやく雪のテラスに着き、下部に居る二人に声をかける。セカンドとラストは時間短縮のため同時に行動させたが、上部の悪場では二人とも相次いでスリップし、必死の形相で登ってきた。

三P目、ルートは頭上のハングにそって左へ水平にトラバースするのであるが、切れ切りのバンドと外傾のフェイスは悪い。その上、バンドに乗った雪塊落としにも苦闘を強いられ、途中から進めなくなってしまう。最後にやつとこのことで草付にアイスハットケンを打ち込み、それをピンとして使用、約一〇がのザイルを頼りに下降を行う。そこから一段下の雪壁に降りてそのままザイルいっばいまでトラバースをする。

四P目、この地点から正規のルートに戻するため、雪壁とフェイスの混じり合った部分を右上し、傾斜路の入口まで登る。ここは夏の三P目のビレイ点である。

五P目、まず頭上の大まかなフェイスを左上し、アプミを使って右上している逆層の傾斜路に入った。ここは、夏の初登時には外傾スラブをフリクションで登ったのだが、現在は水が張りつめていて非常に悪い。左壁にハークンを連打しながら必死になって登った。しかし、出口で不安定な氷の張ったスラブに阻まれ、進退極まってしまった。苦しまぎれに草付に打ったアイスハットケンに助けられ、ようやく危機を脱した。セカンドとラスト

も苦戦してここだけで二時間以上も費やし、おかげで今日中の完登は全く望み薄となってしまった。

六P目、傾斜路の出口から脆いフェイスを五が登ると固い雪壁となり、太ハング下までザイルを伸ばしてビレイする。ここは夏季には草付スラブとなっていて、現在は急な雪壁でツェルトを張れるような場所はなく、かろうじてハング帯直下にやつと腰を降ろせるほどのバンドが見つかり、そこを踏み固めてツェルトをかぶる。

十四日(曇のち雪) 昨日から通算七P目、ピバーク地点から右上気味に雪壁を横断しハング帯の右端まで二〇が登る。八P目、外傾フェイスからハング帯の右稜を形成しているカンテを微妙なバランスで回り込む。右手のガリー状凹角に入ってから直上し、出口を左へ越えて雪に埋まったバンドテラスに出る。ここで残置ハークンを掘り出してビレイしセカンドとラストを上げる。

九P目、トップを安井に替わって、凍った草付フェイスをザイルいっばいまで登り、上部ハング帯直下でピッチを切る。

一〇P目、再びトップを交替し、左へハング帯を巻く夏のルートは敬遠し、右手の凹角をルートに選ぶ。スタートは頭上のブッシュ帯を利用して一〇がほど凹角を左に巻き、巨大な雪塊をいくつも落

とし、ようやく凹角に入り込んだ。そこで凹角のどん詰まりのハンダに阻まれ、右手のチムニーに入り、中の雪を掻き落としながらズリ上がり、大きなブッシュのあるテラスに到着し大休止。

今後のルートを検討したが、頭上はハンダ帯で右手には垂直の凹角が二本落ちていて見通しが立たず、このピッチを克服するには相当の労力と時間が必要になりそう。

一P目まず大木の枝を利用してハンダ帯直下のバンドに登り、右へ五層トラバースして第一の凹角トラバースにかかると。アイスハーケンを一本打って振り子気味に凹角の中に入ろうとするが、なかなかふん切りがつかず、さらにもう一本加えてそれをホールドにし、ジリジリと身体を右に倒してトラバースを開始、しかし、すぐに行き止まりとなり、二、三度これを繰り返したがどうしてもトラバースできず、元の場所に戻る。

今度はアプミに乗り、思い切り身体を右に倒して草付にアイスハーケンを打ち、これを頼りによりやくハンダ帯の突破に成功する。第二の凹角まではカンテとバンドを右上気味に進み、被ったバンドを小指ほどのブッシュをつかんで必死にトラバースする。手あたりしだいに残置ハーケンを求めてピッケルを振ると、雪の中から夏に初登した宇都宮パーティの残置ハーケンが出てきた。これにザイルを通してひと呼吸入れ、さらにハンダ

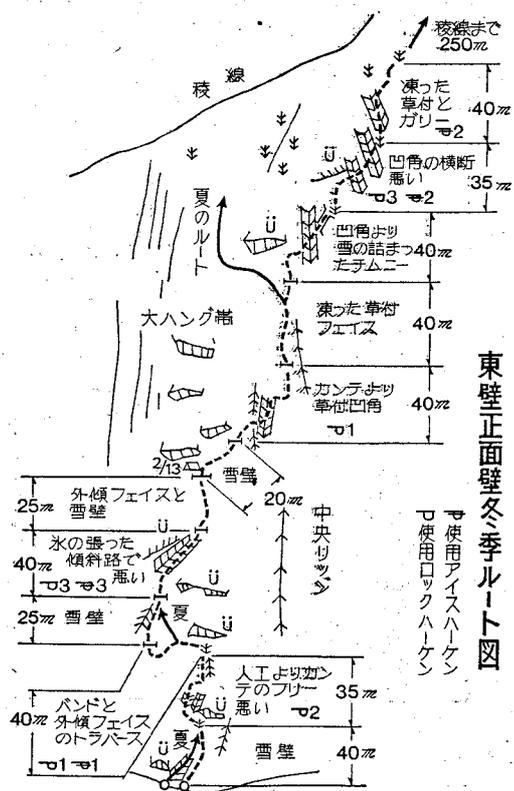
たカンテにハーケンを一本加えて右に回り込み、凹角を途中からトラバースして右上のブッシュにアプミを巻きつけ、腕力を頼りにはい上がる。さらにブッシュから五層ぐらい雪壁に登り、ハイマツに達してビレイする。

このピッチは上部の核心部でトップだけで一時間半を費やし、セカンドとラストは時間短縮のためにゴボで登らせた。一二P目、ここからブッシュ帯までは一投足の距離であり、その上今まで登ってきた岩場より傾斜が緩いので甘い気持ちで登り始めたが、すぐに困難な登攀となり、遅々として進まない。ここでも凹角の登攀に苦しめられ、氷化してハーケンの効かない悪い凹角を、ピッケルとアイスハンマーのコンビネーション登攀で

必死に突破する。しだいに傾斜が緩くなりブッシュ混じりの雪壁となってくる。木の枝を掘り出しての腕力登攀となった腕力登攀を一〇層ほど続けると、完全なブッシュ帯となり、そこを登って夏の終了点に着いた。ここからはコンティニューアスで急峻なブッシュ帯を二五〇層登り、頂上右手の稜線直下に達したが巨大な雪庇に行手を阻まれる。ここは延々一時間半を費やしてやっと切り崩し、ようやくこのことで稜線に出た。

稜線は台地状となっており、ここでのビバークも考えたが気を取り直し、稜線を五峯とのコルに向かい、ワサビ沢を下って明神を目指す。腐った雪に難渋しながら出合に着き、さらに疲れた身体に鞭打って上高地の木村小屋に深夜到着した。

### 東壁正面壁冬季ルート図



### 「登攀後記」

「タイム」ビバーク地点発(七・三〇)夏の終了点着(一六・〇〇)稜線着(一九・一〇)コル着(二〇・三〇)ワサビ沢出合着(二二・三〇)上高地着(〇・一〇)

〔使用装備〕ザイル九本×四〇×二本、アプミ各三合、アイスハンマー二本、ピッケル三本、アイスハーケン六本、ロックハーケン各種一五本、ボルト五本(未使用)、ジャンピングセット、ジュリナーゲ一五本、ツェルト一張り、コンロー合、ガソリン一合、メタおよびフォック若干。

正月の不帰二峯東壁下部と上部三角形岩壁は、かなり技術的に困難なルートかと期待していたが、結果としては下部、上部ともノービバークで登ることができた。しかし、そのことが逆に技術的な面で物足りなく感じられ、昨年敗退した東壁に挑んでみる気を起こさせた。東壁は予想通り極めて困難で、一日に六Pすつしか登れない登攀となってしまった。とくに二、三、五の下部三Pと一、一二の上部二Pは、私が現在まで二〇ルートあまり経験した冬季のルートの中でも、上位にランクされるピッチであった。

東壁に残された今後の課題は、中央リッジと左フェイスであろう。とくに左フェイスなどは、夏季のルートグレードでは東壁正面を上回る内容を持っている。かなりの困難が予想されるが次の目標としたい。

(記・木村 智)



南壁冬季ルートの開拓

# 二二六三峰西壁と南壁 左方ルート冬季初登攀

登攀倶楽部・岐阜

## ▲岩場の概要▼

二二六三峰の岩場はS字ルンゼとワサビ沢に挟まれた主稜線の左、右（梓川から見て）および前面に拡がっており、それぞれ西、東、南壁と呼ばれている。このうち頂上からS字ルンゼ側に落ちる岩場は従来あまり知られていなかったし、西壁とも呼ばれていなかったが、これは位置関係からいっても東壁の反対側で、しかも地図上においても明らかに頂上に對して西に面しているの、ここでは西壁とした。

登攀史からいうと西壁が古く、S字ル

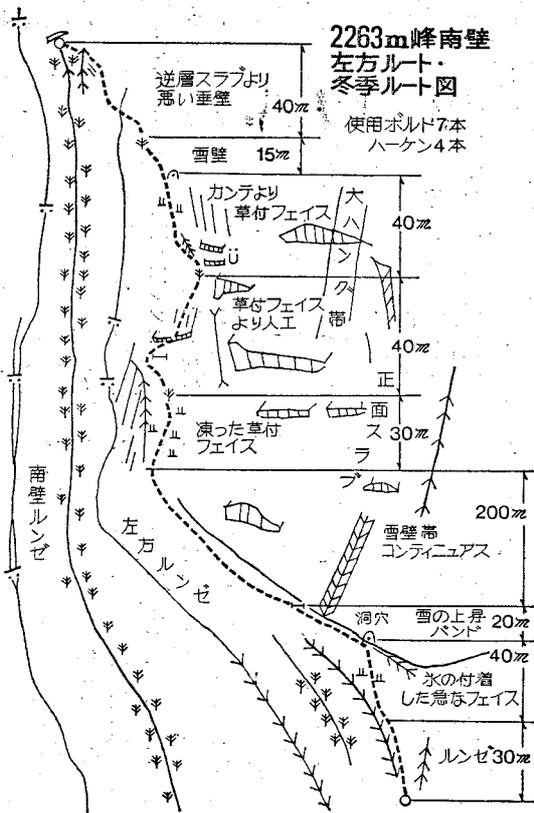
ンゼは既に大正時代（一九二三年）に登られている。これはS字ルンゼは上高地から望むことが出来る最も近い岩場であるということや、ルンゼというところが大きく影響していると考えられる。これに對して南壁は昭和三十六年になってからやっと登られたに過ぎず、遅すぎた開拓といえよう。これは明神岳全域についていえることであるが、あまりにも上高地から近いことや、戦後の穂高の華々しい登攀史の中から漏れているために、情報不足の状態になっていて、意欲的に立ち向かう人がいなかったことなどによると考えられる。

## 〔西壁の雄・S字ルンゼ〕

西壁の代表的な岩場はS字ルンゼであり、ここを挟んで左右に側壁が存在する。左壁に当たる部分は高距が低く、せいぜい二、三Pで終わってしまう小さな岩場で登攀の対象とはならない。これに對し右壁に当たる部分は二二六三峰の頂上から切れ落ちていて幅五〇〇M、高距三〇〇Mはあろうかという大きな岩場で部分的に草付帯があるため、登攀価値が減じられるが登攀対象としては充分である。S字ルンゼは取付は上高地と明神池とのほぼ中間あたりのかすかな押出しである。注意しないと見逃してしまうが、遊

歩道から一〇〇Mも入れば明瞭な沢の押し出しとなっているので見当をつけてシューズを分け入れれば容易に見つけることが出来る。涸れた沢をしばらくつめると右手に南壁の圧倒的な垂壁が見えてくるが、ルートはこれを右手に見送って左へ涸沢をつめるとやがて水流を伴った二つの滑滝にぶつかる。いずれも左岸を巻いて登ると様相はゴルジュ状になって右に大きくカーブしてくる。右手にはずっと逆層のハング帯が続ぎ、左手には五、六〇Mの滝が落ちている。S字ルンゼの核心部は右にカーブを切り終わった地点から始まる。最初の滝は右手から落口上へトラバースするがノー

2263m峰南壁  
左方ルート・  
冬季ルート図



ザイルで登れる。F4からが本格的なスタカット登攀となり、ルートはルンゼの芯通しに登る右ルートと、右岸ぞいに走る凹角に沿って登る左ルートとに分かれる。

右ルートの一P目はF4の左壁の凹角から始まって、これを一〇〇登って落口を右に横断し、つぎのF5は右壁に当たるカンテ状を約一五登ってビレイ。二P目、F6の右手の外傾バンドを微妙なバランスで左へトラバースし、ルンゼ芯をフリクションで登ると大きな赤いチョックストンに突き当たる。これを右から越えたと登攀終了点で、あとは洒れたルンゼが約三〇〇登続き、源頭のチムニー滝を左に巻くと草付帯に入る。コルへは

一投足である。

左ルートは取付から左へ五登トラバースして凹角に入り、これを直上すると二P目で洞穴状オーバーハングに遮られるが、これを右手から越えてピッチを切る。三P目は左上しているルンゼ状で、これも約三〇〇登でチムニーを持った洞穴に拒まれる。このチムニーはかなり困難で出口を右に越えたとプッシュに入って登攀終了である。ここからはプッシュ帯をそのまま辿って簡単にコルに出られる。

西壁フェイスII S字ルンゼの側壁に当たる部分は幅約五〇〇登にわたって大きなフェイスを形成している。ここでは第一から第三まで三つのフェイスに区分して説明しよう。

第一フェイスはF1付近から始まり、F3手前までの幅二〇〇登ほどのカンテ状の岩場を指している。下部は一樣に逆層のオーバーハングを持ち、上部には素晴らしいカンテがあって、これが一直線に稜線まで突き上げている。高距は下流ほど大きく、ザイルピッチにして一〇〜一二Pぐらいと思われる。われわれが一九七七年に試登した時には下部のハング帯で追い返されているのでルートの詳細については判らないが、下部と最上部が人工になりそうである。未踏ルートの一つである。

第二フェイスはF3付近を中心にして幅一〇〇登ぐらいで、下部七、八〇登がハング帯、中間部約一〇〇登が草付フェイス、上部五、六〇登が垂直のフェイスで構成されている。ザイルピッチにして八〜一〇P程度と思われる。中間の草付帯の処理がポイントとなりそうだが、われわれは未だ試登に至っていない。

第三フェイスはF6から最上部のチムニー滝に至るまでの幅広いフェイスだが、S字ルンゼが高度を上げるに従って高距は短くなっている。第二フェイスに近い部分は草付が多く傾斜も緩いが、ピッチ数は多くて六〜八P程度である。また最上部はせいぜい三Pぐらいの登攀と思われ、一連のハング帯に囲まれて難しくそうである。われわれが登ったのは最も傾斜の緩い場所、今後は左右に展開するハングを交えたルートが目標とされる

だろう。

【未開拓の南壁】

南壁は上高地から最も近い位置にあって、河童橋からもよく見えるので、名前は知らなくとも写真を見れば誰も「あの岩壁か」というような岩場である。

この岩場の登攀史は明神岳の中では最も新しく、昭和三十六年に初めて岩稜会によってハーケンが打ち込まれ、その後も大ハングルートが追加されたのみである。アプローチは河童橋から取付まで約一時間と非常に短い。S字ルンゼ出合から約四〇〇登ほど明神池側に寄ったところに押出している沢がその出合である。ここから二、三〇分ほど沢をつめると南壁基部に着く。

岩壁の大きさは幅四〇〇登、高距二〇〇登と思われ、正面から左へルンゼが一本走り、さらに最右端にもルンゼが一本岩壁に食い込んでいる。壁の特徴としては中央にリッジがあって、その左にスラブ帯、さらに左にハング帯が連なっている。右手は下部が草付フェイス、上部が一連のハング帯となっている。壁の傾斜は全体的に急で、正面スラブと右フェイス下部の草付帯だけが弱くなっている。

ルートは岩稜会ルートがスラブの左端から取りついて右上して伸び、上部のハング帯の下で左へトラバースしてプッシュ帯に達している。また大ハングルートは左方ルンゼを二〇〇登ほど登ってから



上部壁2P目のハング登攀

取りつき、合計三つのハングを突破して五Pでプッシュ帯に入っている。

なお通常左方ルンゼと呼ばれている基部にそって左上しているルンゼ以外に、プッシュの尾根を挟んで左側にもう一本スケールの大きなルンゼが走っていて、一直線に頂上に突き上げている。今までは明確な名称はなかったようだが、ここでは南壁ルンゼと仮称する。取付から圧倒的な滝が連続して南面でも最も困難で長いルートと思われる。われわれは未だ試登にも至っていない。

### ▲南壁左方ルート

#### 冬季初登攀▽

一九七八年一月二三日 パーティ員  
木村智、阿原悦郎

南壁は私自身にとつては夏冬ともに未経験の岩場であり、西壁と東壁に続いて一度は冬の登攀を試みたいと思っていた。今冬はいろいろ都合が重なって正月に他のメンバーと一緒に入山することが出来なくなり、単独で穂高のどこの岩場を登ろうと考えていた矢先、正月明け三日間だけなら入山出来るという会員がおり、南壁にルートを開くこととして準備を進めた。

予定のルートは最初、夏にもまだルートが開拓されていない右フェイスを狙った。

だが、岩壁基部へ来てみると、下部はプッシュが多く、意欲がそがれた。そのため正面から左側に目標を変えざるをえなかった。正面のストラップは傾斜が緩くて一見簡単そうであったが、逆層の岩に付着した氷と雪によって夏にはフリクショで登れるところにポルトを打たされる恐れがあり、抵抗感を覚えた。従って最後に残ったルートとして左フェイスのハング帯を対象になったが、結果としては時間の関係もあってルートは一ピッチを除いてフリークライミングに終始した。

#### 冬季ルートの開拓記録

一月二日(晴後曇り)木村小屋で登山届を済ませ、河童橋に向かうも、暖冬異変のため、ところどころ路面が顔を見せているのには驚かされた。ちょうど十一月初旬といった感じで周囲の山肌も真っ黒である。梓川の河原にも雪はなく、河童橋から望む南壁も黒々として見えた。明神への遊歩道をゆっくり歩いて南壁出合まで来たところでザックを降ろし、南壁取付まで三、四〇分という場所にベイスを設置する。今日は偵察と荷上げを重点的に行い、時間があれば一、二P登ってザイルをフィックスして帰ることにする。

沢身は雪が少なく、最初はガラ場で上部に行くに従って雪壁状になってきた。南壁ルンゼを左に見送ってなおも頭上いっぱいに広がる岩壁目指して進んで基部

に着いた。

基部から見るトラバースバンドは氷化して悪そうだったのでルンゼ状を登ってバンド上部に出ることにした。が、三〇分ほどで行き詰まり、小さなテラスで登攀具を出してスタカットに移る。

目指すルートは左上気味の氷化したルンゼである。二〇分ぐらい直上すると急に難しくなると、ハング気味のところで進めなくなってしまう。左は急なカンテ、右は氷の張りつめた外傾ストラップで、結局、ハーケンを打つことも出来ずに下降する。

フットホールドぐらゐの位置に一本のアイスハーケンを半分ぐらゐ差し込み、根元にシュリンゲを巻きつけてそれを頼りに一〇分ほどザイル下降した。途中から右手の氷の張った急なフェイスに取りつき、出歯のアイゼンを効かせてバンドに向かつて直登すると、洞穴よりやや手前のバンドに達した。このままバンドを登って洞穴でビレイ。セカンドも一旦アイスハーケンを抜くためにルンゼを登ってから再度右へ登り直した。

このピッチで一時間半も要し、こんなことなら基部バンドを忠実に辿った方が早かったと思ひながら、洞穴から出て上部へ向かつてバンドを登って行くと雪壁に出た。ここに残置ハーケンが見つかったのでピッチを切る。

最初の予定ではこのあたりから直上するルートを開拓するつもりであったが、

壁を見ると、逆層のストラブに氷が張り付いており、アイゼンを着けた状態では非常な困難が予想される。夏ならフリクションで登れるところにボルトが必要となりそうなので予定を変更、大ハングルトのさらに左方に目標を変える。

ここからは雪壁帯が続いていて上部に行くに従って草付フェイスに変わっていく。約二〇〇mをコンティニューアスで進み、大ハング帯の下で再びスタカットに移る。

上部二P目は段状になった草付フェイスをやや左上気味に進み、三〇mで小さなブッシュに達してピッチを切る。

二P目、急傾斜になった草付フェイスを登って小さなハング帯に達し、ハング下のバンドを右へ身体を反らせながらトラバース。そのあと頭上のストラブを直上して大ハング帯左端を目指すことにし、ボルトを取り出す。一本目のボルトの孔あけは岩質が固く、キリを折ったりしながら三〇分以上もかかってやっと埋め込む。ボルトにアプミを吊り、さらに上部をうかがっている間に時計はすでに一六時を回ってしまい、今日はここまでにする。

ザイルを一本固定して阿原の待つブッシュまで懸垂下降。すべての登攀具をブッシュにデポして雪壁帯までそのまま下降。さらに雪壁帯を洞穴手前まで下降し、ビレイ点から洞穴まではスタカットで下る。洞穴からの下りは残りの一本のザイルを固定して再び懸垂下降で基部に降り

立った。

基部からは薄暗くなった南壁沢を駆け下ってBCに戻った。

「タイム」沢渡山吹トネル手前発（四・四〇）上高地（八・二〇）南壁沢出合BC（九・二〇）南壁基部（一一・三〇）最高到着点（一六・〇〇）BC（一七・〇〇）

一月三日（雪後曇り）昨夜からの雪は朝になってもやまず、テント周辺は一〇m以上の積雪である。ピバーク出来るようにツェルトとメタをザックに入れる。

昨日のガラ場はすべて雪に埋まり、アイゼンでの登高は下が隠れているために歩きにくい。岩壁基部まで来ると壁は一面真っ白になっていかにも冬の岩壁といった感じである。猛然とフアイトが湧いてくる。

登高ルートにはフィックスド・ロープがあるので容易で、洞穴まではゴボーで登り、そこからの一Pをスタカット、さらに雪壁に出てコンティニューアスで二〇mほど登ると上部岩壁の基部に着いた。なおもフィックスド・ロープに導かれ、デポ地点のブッシュまでゴボー登り。新雪で昨日は何でもなかったところが今日は非常に悪い。ビレイ点のブッシュで登攀用具を身につけ、昨日の最高到達点に向かう。

昨日のボルトからいよいよ登攀を再開。带状ハングの根元にボルトを一本打ち加え、小さなハングを越える。出口からもストラブが続ぎ、雪の中で硬い岩にジャン

ピングを振るってボルトを埋めこんでいく。五本ほど連打すると傾斜がきつくなって脆く破った壁が現れた。これを突破すると草付フェイスになりそうだ。

出口はリスがありそうに見えても適当なのがなく、結局、先が五、六mくらいしか入らない中途半端なハーケンを打ってフリーに入ろうとしたが、なかなかふん切りがつかない。もう一本ハーケンかボルトを打とうと思いい、リスを探がしてピッケルを振り回すと、上部の雪が崩れて一ぱぐらい上に木の根が顔を出した。これ幸いとハーケン代わりに使うことにし、シュリンゲの先にカラビナをつけて数回投げ上げて引つ掛けた。どうやら体重を支えてくれそうなのでシュリンゲをつかんで草付フェイスに出た。

この急なフェイスをフリーで克服すると、枯れた大きなブッシュのあるバンドテラスに着いた。四〇m一杯であった。上部壁の通算三P目は、直上するにはハング帯の連続で時間がかかりそうだ。雪が降っていることもあって、あっさり左へ回りこむことにする。

カンテを左へ越えようと急な草付フェイスになり、アイゼンを効かせて強引な登攀で高度を稼ぐ。左方ルンゼを左に見ながらザイルを一杯に伸ばし、小さな洞穴に着いてセカンドを迎える。

四P目、ここから右へ出て小垂壁を越えたと大ハングルト上部のブッシュ帯へ行けそうだ。が、ルートは左方ルンゼ

上部を目指し、一五mくらい草付フェイスを登ったところで一旦ピッチを切る。

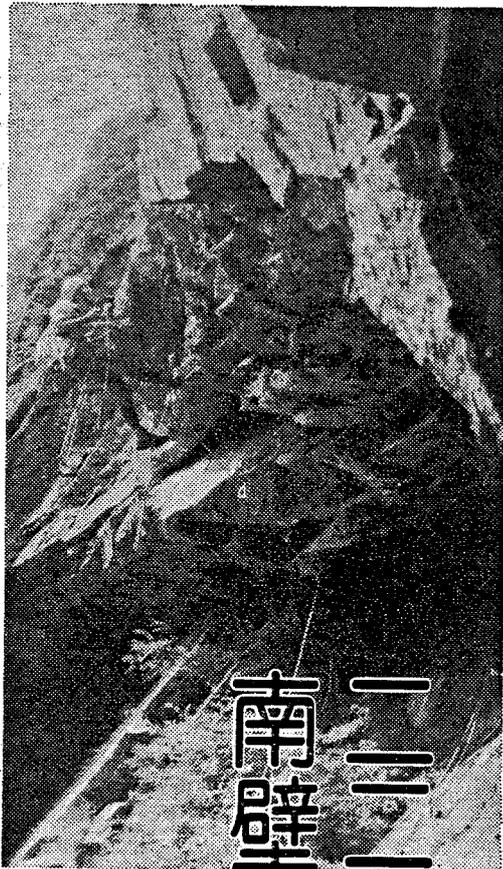
五P目は左方ルンゼの逆層ストラブを左上気味に横断し、南壁ルンゼとの中間尾根に向かってトラバース。ブッシュ帯に入る手前に小垂壁があり、被り気味になっていて非常に悪い。ハーケンを打ち、小指ほどのブッシュに全体重を預けてのアクロバチックな登攀で突破した。そのあとはブッシュが多くなり傾斜も緩くなった。約一〇mでリッジ状の大きなテラスに出て、事実上の登攀を終えた。

下降ルートは南壁ルンゼとの中間尾根を懸垂下降を交えて下り、途中で暗くなったところでピバーク地が見つかり、そこでツェルトを被る。翌日は南壁沢に降り立って一段と深くなった沢を下降してBCに戻った。

このルートは上部壁取付から五Pという短さで、その上ハング帯直登を避けたためにフリークライミングが多くなった。冬季開拓といっても中味の濃いルートではないが、今後は夏にルートを開くのと同時に、冬季においても、自由に思い通りのルートを登ることに主眼をおいた登攀をしたいと願っている。

「タイム」BC（八・〇〇）南壁基部（八・四〇）上部壁取付（一〇・〇〇）終了点（一一・二〇）ブッシュ帯のピバーク地（一七・三〇）BP（一七・〇〇）BC（一七・〇〇）

（記・木村智）



# 二二六三〇m峰西壁と南壁のルート開拓

登攀倶楽部・岐阜

## 《西壁第三フェイス夏季初登攀》

一九七七年七月十九日 パーティ員 木村智、成瀬一基

この日、最初は第一フェイスを狙ったのであるが、一P目の脆いハング帯に追い返され、やむなく第三フェイスに転進した。

S字ルンゼの核心部を登って赤いチョックストンから第三フェイスに取りつく。一P目は小さな垂壁を越え、カンテにルートをとり、左上気味にこれを直上する。上部は草付混じりの段状フェイスになっているので不確かな草を掴んだりしながら

ラザイルを一杯伸ばす。このピッチはハーケンを打つまでもなかった。

二P目、一見簡単そうに見える上昇バンドが右上している。トップを成瀬に任せる。が、ここが明神の難しきで、下からは容易そうに見えるが実際はホールドが外傾していて、注意しないと進退きわまってしまふ場合が多い。トップはバンドに登るまでに行詰まってしまい、二度登り降りしてからグサグサのハーケンを打ち、折れそうな小指ほどのブッシュに頼ってようやくバンドが上がった。このバンドも傾斜は強く、きわどいバラ

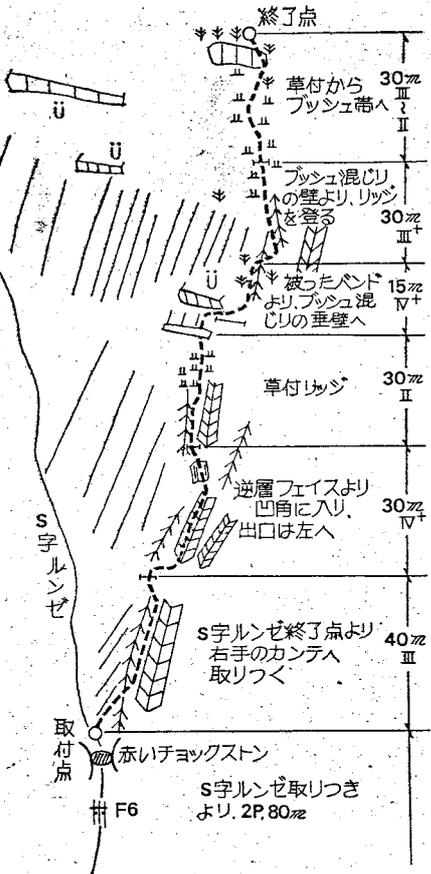
ンスで右上すると凹角状になってやがてハングに突き当たった。ここからルートは左で、一枚ストラブをフリクションで登り、草付フェイスに出てブッシュでピレイ。

三P目、やや傾斜の緩くなった草付フェイスを左上。二五材でバンド状テラスに着いた。ここから上はハング帯が連なっていてルートの取り方が難しく、ボルト連打で直上するか、左へ切れ切れのバンドをトラバースして直上するルートをみつけるか、ハングした草付バンドを強引に右上へ抜けるか、三つのうちの一つを選択しなければならなかった。われわれは三つ目のルートを選んだ。

三層ほどだ。最初から被っており、トップは腕力を頼りに強引なトラバースをはじめたが、力尽き元の位置に戻る。二回目はフットホールドを出来るだけ遠くに求め、重心をジワジワと移してゆく。最後はバンドの出口から思い切り手を伸ばし、ブッシュの根元を握って垂壁部に入った。ここからはブッシュ混じりなのでザイルがよく伸びるだろうと思っていると、トップの成瀬はバンドトラバースで疲れたのか、「木村さん交代してください」と声をかけてきた。

木村がトップを交代してバンドを登りはじめたが、かなりハングしていて腕力の消耗がはげしい。途中で一回休んでは通過した。そして、成瀬の待つ垂壁に

西壁第三フェイス登攀概要図



な初登攀を祝して握手を求めた。

西壁で今後開拓の可能性があるルートは、最大のスケールを誇る第一フェイスと、正面壁にあたる第二フェイスである。

ここで大休止をとり、成瀬にささやかな初登攀を祝して握手を求めた。

最終ピッチは傾斜が落ちた草付帯から最後の小岩壁を越えて完全なフッシュ帯に入った。登攀終了点である。ここから稜線までは約一五〇m。フッシュ帯をかき分けながら進むと頂上のやや左寄りのV峯に近い所に出た。

第三フェイスはきわめて短いルートで、弱点を縫って登ったため、ハーケンもビレイ用を除いて一本使用しただけだった。これは核心部といえる二P目と、四P目で使いたくても使えなかったことにもよるが、最近では夏の初登攀というところ、ケン、ボルト連打になりがちの中にあつて、このルートは自然な登り方が出来た数少ないルートだと思ふ。

〔タイム〕S字ルンゼ出合発(七・三〇)第三フェイス取付(二二・三〇)終了点(二六・三〇)稜線(一七・〇〇)B・P(ワサビ沢とのコル) (一七・三〇)

どちらの下部はハング帯に囲まれており、逆層の岩と相まって、かなりの困難が予想される。ザイルピッチは第一フェイスで二〇P、第二フェイスで七〜八Pであるろうか。

《南壁大ハンゲルルート初登攀》

上高地の河童橋に立って周囲を見まわすと、きまびたに眼に飛び込んでくる風景、それはあまりにも見なれた景観である。そして眼を右に転じてゆけば、S字ルンゼから二六三m南壁で止まる。上部は樹林帯に覆われ、下部もまた支尾根にさえぎられて壁はよく見えない。

〔訂正〕第一回の登攀史(開拓史)の中で、第三フェイスの完登日を一九七六年七月十九日としたのは一九七七年七月十九日の間違いなので訂正します。

たために重くなったザックを肩に河童橋に立つ。前回のような連日の雨に比べて今日の空は実に青い。いつもながらにぎわしい河童橋を渡って明神への遊歩道へ。

南壁の押し出しで荷物を二回に分けて洞穴まで荷上げ。洞穴へのルートは左方ルンゼをとらず、洞穴へ直接のびている傾斜のゆるいルンゼを約五〇m登る。荷物をかき上げた時は午後四時になり、洞穴でのビバークを決める。

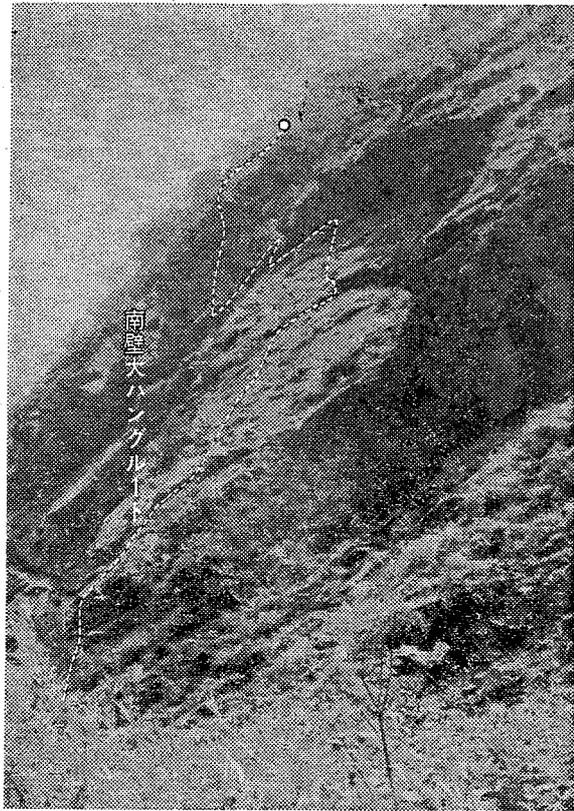
この上高地から展望出来る壁が、いまだに岩稜会ルートのみを許しただけなのは不思議の一語であった。しかし、昨今は南壁を試登するパーティが見られるようである。私たちも上高地からよく見える壁に自分のルートを残そうと闘志を燃やし、最初は単独で挑んでみたが力及ばず、京都の太田君の力を借りてやっと完登することが出来た。

〔試登〕

六月十一、十二日と最初の試登に入山したが連日の雨で取付の洞穴からは一歩も動けずじまいだった。

八月九日(晴)二回目の試登に入山。単独行ゆえと、あまりにも用心し過ぎ

二P目、テラスから右へ約二mトラバースして赤茶けたハングに挑む。ハング下は快適なテラスになっており、ハング



南壁大ハングルートの全容

真ん中にハーケンを打ち込む。しかし、ハーケンは一センチも入らず、かといって岩が脆くてボルトも効かず、不安なので元の位置に戻ってビレイ用ハーケンを打つ。空虚な音とともに岩がはがれそうになる。仕方なく横にボルトを打ってビレイ点とし、再度ハングに挑む。

不確かなハーケンにアプミを吊って上部にホールドを求めるが、不安定なのでブランコに乗り、さらに上部にホールドを求めている最中、突然ブランコがひっくり返ったのか、ハーケンが抜けたのか、とにかく墜落して下のテラスに背中をしまったか打ってしばらく声も出なかった。ボルトのお蔭でそれ以上の墜落をまぬがれたのは幸いであった。

この墜落で恐ろしくなってしまう、不甲斐ないが下降する。

〔完登〕

一九七〇年八月二十八日～二十九日  
パーティー 沼田慎造、太田忠男

八月二十八日(晴) あまりにも惨めだった前回までの試登に幾分嫌気と弱気が生じてしまい、夏中にルート完成ができるかどうか怪しくなった。しかし、どうしても完成させたかったので京都の太田君の力を借りることにする。

九時四〇分、洞穴に入ってみて驚いた。前回残しておいたボルトとハーケンがなくなっており、山男のモラル低下をまざまざと見せつけられた。しかし、例によって強気なパートナーに励まされて取付着一〇時半。

一P目、前回苦勞して獲得したピッチを見事なバランスで越えてゆくトップの太田に羨望と嫉妬と期待が入り混じった複雑な気持ちである。二P目のテラスから前回失敗したハングに沼田が取りつくも、先回同様あまり喰い込まないハーケンに墜落時の恐怖がよみがえり、どうしてもあと一步の突っ込みが足らず、再び太田とトップを交代。

太田は少しためらっていたがやがてハングを越えてゆく。ウラヤマシイ！ 実に見事なバランスで上部フェイスをフリーで攀じてゆく。登り切ったところのハング帯で頭を押えられ、左へ七、八メートル進んでラパスしてブッシュ帯に入ってビレイ。続いて沼田が続く。上部からビレイして貰っているとハングもわけなく越せる。

岩登りは半分以上精神的なものだと再確認してもっとも自分自身が強くならねばと思う。ブッシュ帯をそのまま右斜上して大木の根元でビレイ。

核心部の大ハング帯はここから始まる。大木から左へトラパスし、ハングの一番張り出したところを太田に指示する。そこは約三層は確実にでっばっており、交代しながらボルトを八本連打して抜ける。上部はスラブでまっすぐにボルト連打で攀じる。上へゆくにつれて壁は外傾してくるが、岩は固く労ばかり多い。こ

＜穂高岳山荘男子従業員募集＞

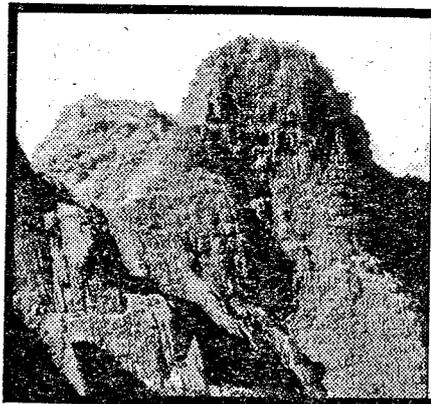
- 5/1～11/6の期間勤務可能な人
- 岩登り、冬山経験者
- 30kg程のポッカを出来る人
- 年齢25才までの人
- 自主独立、協調性を有し、明朗快活な人
- 心身共に健康な人
- 募集人員 若干名

希望者は、上記項目等に関して、詳しい自己紹介文を履歴書に添えて、下記住所宛お申し込み下さい。

〒506-11 岐阜県吉城郡神岡町東町504

穂高岳山荘

☎ 0578-2-2150



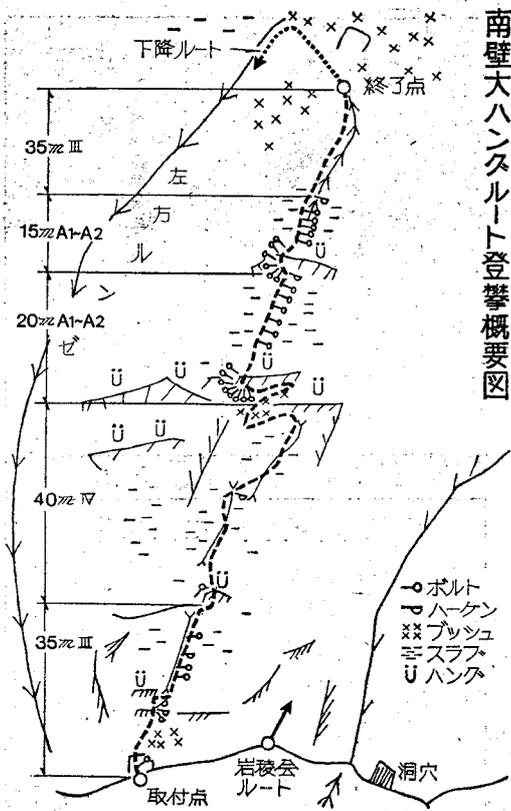
こも太田の独壇場で大活躍である。そして彼は苦しいにもかかわらず適当にお世辞をまじえて、私を励ましてくれる。憎いほど文句のつけようもないパートナーである。

五時四五分に時間切れとなつてしまい、登攀を打ち切ってハング下のテラスに下降してビバーク。

夜は星空の下で上高地の灯を見おろしながら、二人でいろいろ語り合う。この一時は実に貴重で、尊いの一語に尽きるものだ。新人の頃から知っている太田君が見事に成長していく姿は底知れぬ可能性を秘めているようで心強い。今日の登攀を祝して乾杯。

二十九日(晴)今日も晴天を約して太陽は登る。今年の夏は天候に恵まれ過ぎ

### 南壁大ハングルート登攀概要図



ているようだ。

七時登攀開始、昨日の最高到達点着九時半。ここから数分登って上部ハング下でアプミビレイ。次のハングはトップを私にゆずってくれるパートナーの心づかいは実にうれしいが、彼のようにスムーズに登る自信がなかったので恥ずかしかったが辞退する。きょうの日のために敦賀半島で、霊山屏風岩でトレーニングしてきたのだが、旧態依然たる自分のクライムに激しい劣等感をおぼえる。

このハングも当初から考えていた通り、一番大きいところの登攀を太田に指示する。長い時間ハングにぶらさがりながら苦闘するトップに、ただ感謝あるのみ。ハング下でレモン、トマトジュースなどを手渡すと「二人の世界……」などと氣

楽なことをいながら、トップはやがて姿を消してゆく。

トップを交代し、上のスラブを沼田トップで攀じている時、ハーケンが抜けてこの壁で二度目の墜落。ハング下にブラさがるも、太田の確実なジッヘルでさしたるショックもなく止まる。プラ下がりながら見る上高地は静かだ。毎度毎度のことで墜落慣れしてしまったのか案外平気でいられた。太田に「大丈夫だぞ！」と声をかけ、壁に戻ろうとしたがザイルが足りず、ハングの出口に足がとどきそうなのでザイルをおろして貰う。太田は確保時に両手にヤケドを負っていたが、一言も不平を言わずに作業を続けてくれた。再度ハングを越えて太田の足下でビレイ。

再びトップを交代して太田が不自由な両手でボルトを連打しながら上部岩壁へ。岩壁に取りついてみると傾斜は落ちてフリークライムとなり、登り切ったところが終了点であった。

ここでビバークを望む私と、きょう中に下まで降りようとする太田との意見が分かれた。結局彼に励まされて下降することにする。下ることになって、上部の樹林帯へ登ろうとする太田に左へトラバースして左方ルンゼを下降するよう伝え、約五〇メートルトラバースすると左方ルンゼ最上部に達した。ルンゼはここから垂直壁となつて上昇しているが、ルンゼを懸垂下降。下降路はうまい具合に四〇分ほどで

立木があつてこれをビンに順調に下る。三回の懸垂下降であとは草付をすり落ちるようにして一八時四〇分洞穴に着いた。あとは三ツ道具をザックに収納して下降を続け、お互いノドのかわきを口にしながら暗闇の押し出しをがむしゃらに下降して遊歩道に出た。

#### 〔登攀後記〕

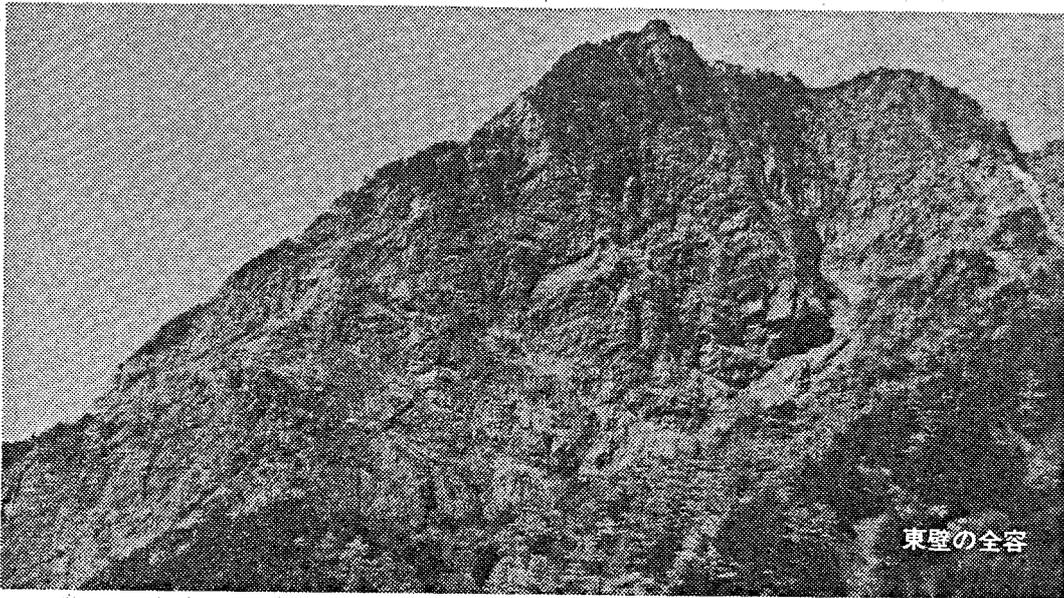
ここは短いルートだが左方ルンゼと組めば結構長いルートとなる。左方ルンゼの、F1、F2はともにさしたる困難はなく、足ならしにほどよいルートである。大ハングルートは人工とフリーのまじった楽しいルートと思うのだが……。

(記・沼田慎造)

日本山岳会学生部編  
**年報** 第六号 21×20cm 276頁 定価3,600円  
 巻頭言「大学山岳部への提言」吉阪隆正  
 ■特集◎大学山岳部の原点を探る／滝谷／ナンド・コート初登頂／北鎌尾根独標側稜より北穂高往復／春の刺岳より西穂高へ／宇奈月より西穂高へ／利尻岳／白馬岳名刺尾根／大タテガビンよりハッ峰 ■学生部海外登山報告／ミヤール・ナラ／ドウナギリ ■ほか  
 お茶の水駅前 **茗溪堂** お求めは最寄り書店でどうぞ！ 東京都千代田区神田駿河台2-1

# 2263m 峰東壁の岩場

登攀倶楽部・岐阜



東壁の全容

## 〔東壁の概要〕

二二六三m峰東壁は明神池から見ると頭上に覆い被さるように落ちこんでいる岩壁であり、五峯南稜にワサビ沢を挟んで対峙している。

東壁のスケールは大きく、上高地から明神への遊歩道から見える二段になったフェイス（前面フェイス）よりワサビ沢の支沢のどん詰まりに位置する奥壁まで幅一キロ、高距三〇〇mもあり、隣接する五峯の岩場に比べて勝るとも劣らない規模を誇っている。

初登攀は一九五二年の日本山嶺倶楽部パーティで、この時のルートは正面付近と思われるが、詳細なルート図は発表されていまいようである。その後の登攀もあまり明確ではないが、時折、登るパーティがいるようだった。そのルートは正面付近と思われるが私たちの記録以外にルートを開拓したという話を聞かない。

ただ、JEC（日本エキスペディションクラフ）の山崎金一氏から、右フェイスの大ハンクなどを試登したという情報は得た。私たちが登攀に成功した三つのルート（左フェイス、正面ルート、中央リッジ）以外に今後開拓の余地があると思われるのは、二〇〇mほどの壁が中間バンドによって上・下に分けられている前面フェイス、右フェイスのハンクの連続するスラブ壁と、右カンテの大ハンク、最奥に

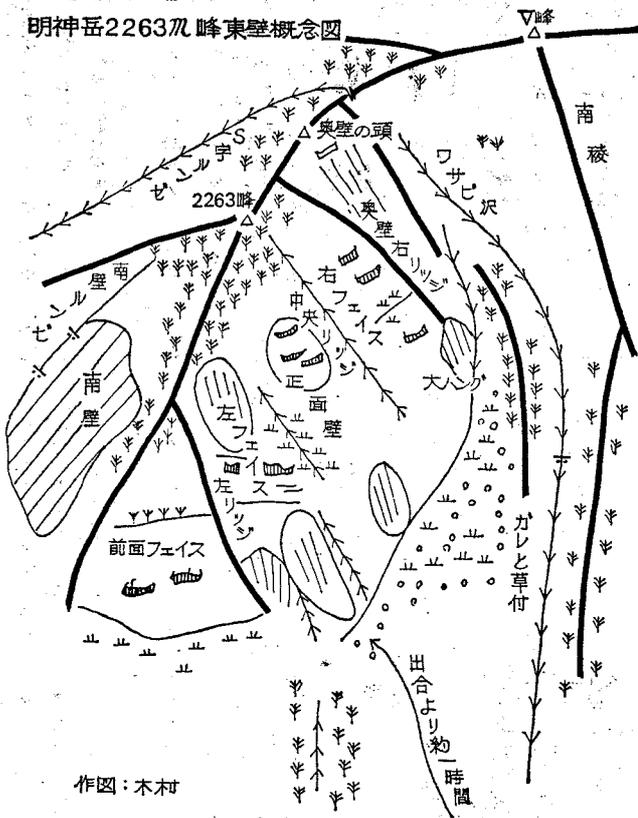
位置する奥壁、また、正面の上部ハンク帯を直上するルートも考えられる。細分化すれば七、八本を越えるであろう。

ザイルピッチは正面壁が一〇〜一二P、左フェイスが一P、右フェイスは登っていないので八〜一〇P程度と推測される。また、前面フェイスと奥壁は短くて六〜八Pと思われる。どのルートを登っても最後の一、二Pは草付フェイスかブッシュ混じりの壁となり、さらに稜線までブッシュ漕ぎをさせられる。

壁の傾斜は右フェイスが全体的に最も急で、下部、上部とも垂壁やハンクが多い。左フェイスは垂壁と緩傾斜帯が交互に現れ、登攀の方も人工とフリーがミックスする。また正面はバンドや草付の部分があつて傾斜が強いわりにはルートは弱点を縫っていて意外とフリーが多い。前面フェイスと奥壁は傾斜が強そうで、短いわりには手強そうだ。しかし、中心線から左右に逃げればフリーで登れるかもしれない。

岩質は全般的に固い。脆い場所は正面の中央リッジぐらいで、その他は五峯東壁などとは比べべくもないくらいである。岩の層は逆層で、一見簡単そうに見えるもすぐに行き詰まるような場合が多い。また、草付フェイスが多いが、そこにはテラスなどはなく、たとえそこがお花畑になつていても四つんばいにさせられる。この岩質ゆえに冬季は極めて困難な登攀となり、最高度の技術を要求される。

明神岳2263m峰東壁概念図



アプローチは通常はワサビ沢を溯行することになる。兩岸にはわずかばかりだが踏跡もあり、出合から三〇分も登ると急に開けて広大なガレに出る。ガレに出たらあとは自由にそれぞれの取付に行けるが、奥壁に行くには右フェイスの下から始まる涸れたルンゼを詰めねばならず、奥壁だけが一・五〜二時間ぐらいかかり、その他はすべて一時間以内である。

登攀終了後の下降路はいろいろ採れるが、最も判り易いのは頂上經由ワサビ沢下降である。途中二、三カ所溝があるが、いずれもクライムダウンで下ることができ。ただし、途中から支尾根を越えて

東壁側にトラバースしないと懸垂下降となる。その他には南壁ルンゼ下降、五峯經由前明神沢下降、S字ルンゼ下降などがある。このうちで、S字ルンゼの状態を知っていれば上高地へはこれが一番早いだろう。ここには途中二Pの懸垂下降がある。

冬季のアプローチはワサビ沢となるが、本流には大きな雪崩が出るので状態をよく考えて行動しなければならぬ。所要時間は正面壁で約二時間である。ただし、その時の状態で大きく左右され、また終了後の下降路はいずれも沢ルートなので細心の注意が要る。おすすめできるのは

S字ルンゼとワサビ沢である。頂上から上高地まで四〜五時間で下れるが、稜線の登高でラッセルを強いられるので意外と時間がかかる。

各ルートの解説は次の記録に代えて省略するが、ともにルート開拓に情熱を燃やした宮本と平松は南ガッシュブルム水河に消えて今はいない。それぞれの初登攀記はいわば遺稿である。その遺稿を読むたびに、苦しかった当時の登攀の模様が昨日のように思い出され、その思い出とともにいつまでも二人が、この東壁の中に生き続けている気がしてならないのである。

(記・木村智)

### 《左フェイス初登攀》

左フェイスは下から第一、第二、第三と三つのフェイスで構成されており、それぞれのフェイス間には傾斜の緩い草付帯が存在する。以下は試登および完登の記録であるがこのうち阿原は試登にのみ加った。

#### 【試登】

一九七五年七月五日 パーティ 宮本武敏、木村智、阿原悦郎

第一フェイスは取付よりいきなり人工登攀となり、スラブ状の壁にハーケンとボルトを交互に打ちながら高度を稼ぎ、上部で三角ハングに頭を押えられた所で

アプミビレイ。このピッチだけでボルト六本、ハーケン二本を使用した。

二P目、頭上にボルトを一本打ち加え、ハング下を細かいホールドを拾いながら左へトラバースする。回りこんだ所より逆層の小さな断壁をハーケン頼りに越え、傾斜の落ちたフェイスを登ってビレイ。

三P目、左がスツバリ切れ落ちたストラブをやや右上気味に登り、五層ほどの赤い垂壁を思い切つてフリーで抜け、逆層の草付フェイスに出てザイルを一杯に伸ばす。この草付フェイスは傾斜こそ緩いが確実なホールドがなく、四級の登攀である。

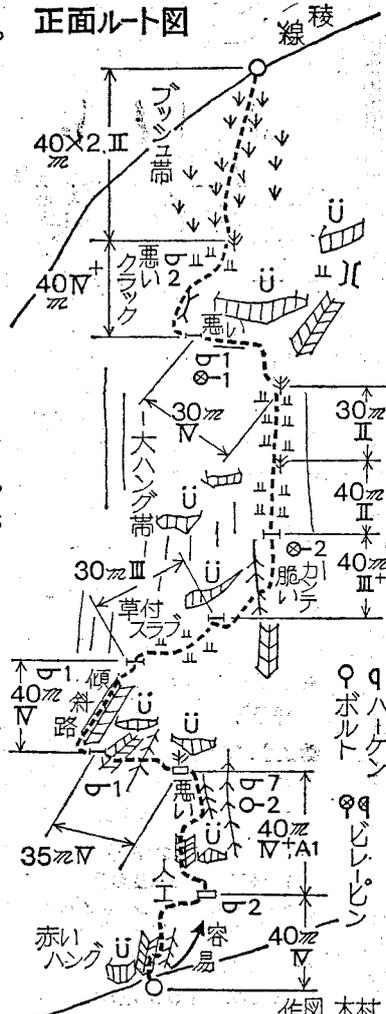
四P目、トップをツルベ式に代わり、同じような草付フェイスを登っていったが、ルートファイディングを確実にやっつてからでない途中で行き詰まりそうなピッチであった。三〇分第二フェイス下に着いてビレイ。

五P目、第二フェイスより再び急傾斜となり、逆層の壁を二〇分登るとハングに阻まれた。このハングの下をハーケンを頼りにトラバースし、続いて二本目のハーケンを打ち、アプミを吊つて体重を乗せ上部をうかがっているうちに、時刻は四時半を回った。今日はこれまでとする。

下降はビレイ点まではシュリングにザイルを通してビレイを取りながらクライムダウンを行う。そのあとは正面壁側をアプザイレンで下つて取付点に戻った。



正面ルート図



く。

一P目、取付は正面ハンク帯の真下の赤いハンクの右手の凹角である。右手の草付フェイスを登ってもいけそうだが、トップの木村さんは急な凹角をハーケンを打ちながら登って傾斜バンドまでザイルをいっばいに伸ばして登った。

二P目、バンドから左手の垂壁に取りつき、最初の五層ほどはフリーであったがすぐにポルト打ちが始まった。トップはかなりの時間を費やして小さなバンドに上がったようだが、そこからは急にザイルの伸びが止まって、ただブツブツという声のみが聞こえた。やがて意を決したのか、「頼むぞ」といいおいてハーケンを打つ音がしたかと思うと、ザイルがするすると伸びて完了の合図があった。

続いて登り出し、垂壁をアプミで越える問題の場所に着いた。見ると、先が五層ぐらい入ったハーケンが二本打ってあり、その上のハーケンにはアプミが吊つ

てあった。そこをセカンドの気安さも手伝って全体重をかけた。そうしたら見事にハーケンは抜けて右手のフェイスにブラ下がってしまった。木村さんに確保をしつかり頼んで最後はゴボーで上のハーケンに飛ついた。あとは細かいホールドに導かれて、カンテをフリーで登ってブッシュのあるテラスへ着いた。

三P目、ルートは左へ外傾したバンドをトラバースしてハンク下まで。なんとなく嫌なピッチであった。

四P目、ビレイ点から左へ回り込んで小さな垂壁を越えて右上している傾斜路に入った。ハーケンはなく、トップはど

うして一本ぐらい打っておかないのかと思ひながらフリクションで登って行くとニッコウキスゲの咲き乱れた草付フェイスに出た。

木村 作  
イ。予定ではこのハンク帯を直上するつもりであったが下まで来てみると、逆層のスラブとハンクが連続して一〇〇層以上もあるかと思われ、とても一日では登れそうもないので、あっさり右に巻くことにした。

六P目、再びトップを木村さんに代わり、右端の脆いカンテを回り込んで草付フェイスに出る。ここをつかみ、このルート二度目の墜落をして上から怒鳴られる。

七、八P目は抜けそうな草をホールドにしての不安定な登攀となり、ハンクに突き当たったところの小さなブッシュで確保する。ここからは右の方へ行けそうだが、ハンク下を左へルートをとることにする。

九P目、左へ切れ切れのバンドをフリクションを利用してトラバースを開始する。途中でホールドがまったなくなっ

てしまい、苦しまぎれにハーケンを一本打ってようやくトップが通過していったが、セカンドで登ってもかなり悪く感じられた。木村さんはビレイ点でポルトを打って確保していた。

一〇P目、このバンドテラスの三方向はスツバリと切れ落ちて、ここが大ハンク帯の真上であることがわかった。ルートは水に濡れたクラックで、やや破り気味である。トップはここをハーケン二本で越えて草付に入つて慎重にザイルを伸ばして行つた。どうやらこのピッチで岩壁の登攀は終わりそうだが、急傾斜の草付帯は悪く、泥に指を差しこんで登っていくと木村さんはブッシュ帯手前の小さな木でビレイしていた。

一P目、トップを代わってブッシュめがけて登っていくと約二〇層で段状となり、かなり大きな木が現れた。ザイルいっばいのところで木村さんに「終わりのようですよ」といって合図を送る。

二人集まったところで相談の結果、今日はここまでとして大木に体を巻きつけてビバークする。不安定な姿勢で眠られぬ夜であった。

翌朝、一二P目のブッシュ帯をトップで登って行くとやがて稜線に出た。ここが登攀終了点であった。木村さんと昨日ここまで登ればよかったと話をしながらザイルをしまう。

〔タイム〕七月十九日、グサビ沢出合(八・〇〇)取付(九・三〇)一〇・〇〇 B・P(二九・三〇)七月二十日、B・P(六・三〇)頂上(七・三〇)コル(九・四五)ワサビ沢出合(二三・〇〇)

(記・平松義範)

※東壁中央リッジ初登攀ルートの記録は、誌面の都合で次号(六月号)に掲載します。

# 明神岳五峰

冬季主稜縦走と前穂東壁の記録

登攀倶楽部・岐阜

穂高岳をめぐる冬季の継続登攀の中で、まだ試みられていないのは明神岳五峯東壁からの奥又、あるいは滝谷への登攀と、滝谷出合から上部岩壁を経て奥又への継続登攀等である。このうち滝谷出合からの登攀は一九七三年の正月に、グレボンと前穂東壁Dフェイスというルートを狙ったが、結果はグレボンを完登して北尾根三・四のコルにはいっただけで、悪天のためDフェイスの登攀はあきらめざるを得なかった。

その後、倶楽部としては剣岳や後立山に力を注いだために穂高からは遠ざかっていたが、七七年の正月に、明神岳五峯東南稜から前穂東壁Dフェイスへの継続

登攀を計画した。結果はまたもや悪天に阻まれて、Dフェイスは夏の終了点に達したのみで、頂上を踏まずに同ルートを下り、三・四のコルに戻って北尾根を下ってしまった。

この時は悪天に見舞われ壁の状態が極めて悪く、奥又の各ルートにアタックしたのはわれわれだけという有様だった。

## 《明神岳五峯東南稜から前穂東壁登攀》

◇一九七六年十二月三十一日～七七年一月六日



明神岳Ⅱ峯の下り

◇パーティール木村智、荒井寿大、成瀬一郎

十二月三十一日(曇) タクシーで山吹トンネル手前まで入り、大勢の登山者と抜きつ抜かれつしながら上高地へ向かう。途中、改築ですっかり昔の趣が薄れてしまった木村小屋で登山届を出したあとと登攀成功を祈ってビールで前祝いの乾杯。

明神への道は左岸ぞいの道を進み、二二六三が峯の東壁が見える地点で小休止を取り、同行の二人に壁の説明をする。

養魚場にはすでに他のパーティがテントを張っていたが、運よく空いていた物置の庇の下を利用してツェルトを張る。

〔タイム〕山吹トンネル入口(五・三〇)上

高地・木村小屋(二〇・二〇) 明神養魚場(二四・〇〇)

## 東南稜の登攀

一月一日(雪) 養魚場の裏手から夏道通りに下宮川を詰める。すでに先行のパーティのトレールがあるのでラッセルの必要はない。途中から宮川のコルへの道を右に見送り、トレールがなくなつて一段と深くなつた下宮川をそのまま進んで、雪の中にかすかに見えている東南稜めがけて樹林帯に入る。ラッセルは深く、時々胸までもぐる。三人でラッセルを交替しながら進み、樹林帯を抜けて広大な雪



深雪を漕いで前穂東壁Dフェイスへ

第二の岩峰は小さいながらも手強く、右手をP、微妙なバランスで越えた。頂上からは再びブッシュ混じりになって次第に尾根は瘦せてきた。そして次のブッシュのピークに達したところで時計は一六時を回ろうとしていた。止むなく今日の行動を打ち切る。ビバークは雪洞を掘ることにして場所を探す。なかなか適当な場所がなく、やつとこの下宮川側の斜面に雪洞が掘れそうな雪壁を見つけザックを下ろす。三人で交替して掘り上げた雪洞は、雪の中からブッシュが出てきてあまり出来栄がよくなく、夜中に天井にポツカリと穴があいて慌てさせられる。

〔タイム〕養魚場(七・三〇)ドーム状岩峰基部(一一・〇〇)B・P(一六・〇〇)

原を左上気味にトラバースして第一の難関であるドーム状岩峰の基部に着く。この岩峰は遠くから見るとスケールが大きくそりに見えるが、基部まで来てみるとそれほどでもない。しかし、ルートに弱点はなさそう、ザイルを使つてのスタカット登攀になった。ブッシュ混じりの壁を二Pで中央部を突破する。ここの通過に一時間を要した。

二日(小雪)B・Pからブッシュのピークを二つ越えようと急に上部が開けて岩稜になった。上部に登るに従って地形は複雑になり、岩峰、ルンゼ、ハイマツ帯と適当にルートを選びながら進む。頂上近くになるに従ってルートを右寄りに取り、最後は急峻なルンゼを右に横断して頂上に続く稜に取りついてこれを直登した。

頂上は岩が露出し、相変わらず視界は悪く、その上岳沢側からの風が強い。〔タイム〕B・P発(八・〇〇)頂上着(一一・一〇)

### 主稜縦走へ前穂東壁

明神五峰頂上からは夏道通りに進み、四峰は稜線通し、三峰はいったんコルに降りてから岳沢側へ回り込んでパットレスの裏手のバンド状をトラバースする。二峰と三峰とのコルに立つと、急に素晴らしい雪稜が目の前に現れ、思わず感嘆の声をあげる。二峰の東稜である。雪のナイフエッジが続く、いかにも冬季向きといった感じがするルートで、最上部の二Pほどの岩峰がちょうどルートの最後を飾る格好の場所に位置している。

問題の二峰の通過は、梓川側のトラバースルートに先行パーティがいたので岳沢側をアブザイルンで中間テラスまで降りる。続く小さな岩場と雪壁を今度はやや梓川側をスタカットでクライムダウンする。この通過はトラバースルートには完全なフィックスド・ロープがある場合が多いので、そちらを通った方が時間短縮になると思われる。

コルからはガラ場がクラストした急な斜面を喘ぎながら登つてようやく主峰に到着。このあたりから疲労のためか成瀬の調子が悪く、ふらふらして最後尾をやつとついてくるという状態であったが、

魅力あふれる溪谷を溯行図とアドバイスで紹介する——

## 沢登りルート図集100選

多くの沢登り愛好者の要望に応じて、ついに出版されたのがこの書である。東京付近だけでなく、日本アルプス、頸城、南会津までかなり広範囲にわたり、その精緻なタッチは溯行図とアドバイスに要領よくまとめられ、完璧なまでの出来映えである。初心者からエキスパートまで、広く愛用してほしい書である。=中庄谷直(大阪わらじの会)

絶賛発売中!!

最寄りの書店でお求め下さい。尚本書についてのお問い合わせは草文社へ。

★発売

**新國民社**

150東京都渋谷区桜ヶ丘24-8  
チサンマンション202号

★発行

**草文社**

東京都渋谷区千駄ヶ谷4-5-1  
ニュー外苑ハイブ201号  
〒151 ☎478-7031



沢登り研究会著  
定価980円(〒160)  
B6判256ページ



トと思われるルートに入る。ストラブ帯に打たれたハーケンとボルトによる人工でザイルを一杯伸ばすと、五〇°角ほどのテラスに着いた。三人パーティーなの、テラスに集結出来ないことなどで時間を費やし、このビッチだけで二時間半ぐらいかかった。

三日目はテラスからのルートは判然としないが、左手にハーケンが見えたのでアプミを吊る。ところが二本目のハーケンに乗ったとたん、これが抜け、あっと思った時には五、六層下の壁に宙吊りになっていた。再びテラスに戻り、今度は慎重にハーケンを打ち直す。ハンクを越えて上のバンドに登ろうと横リスにアゴまで入っていたハーケンに乗ってビッケルを振るつていと、またもや空中を飛び、さきほどの地点まで落下して宙ぶらりんになってしまった。

二度にわたるこの墜落で時間的ロスと精神的動揺は大きく、天候の悪化ということもあって、非常に困難な状況下にいることが判った。しかし、若いパートナー達にはそんな素振りは見せられず、気を取り直して登り返し、再び抜けたハーケンを補強してバンドに立った。バンドからのルートは判然としないが、右上方にテラスが見えたので、ハーケンを一本打ってトラバースを開始。しかし、このトラバースも五層で行き詰まった。

止むなく意を決し、ビバークする旨下の二人に伝える。テラスは狭く、三人集

結出来ないため、木村はバンドでツェルトもなく棒立ちのままビバークせねばならなかった。スノーシューワで雪ダルマになりながらのビバークはつらく、その上非常に長く感じられた。下の二人に声をかけたり、足踏みしながら夜明けを待ったが、正月早々から精神力を試されているような気がしてならなかった。

五日(雪) 登攀準備をしていて右手の指先と足先に感覚がないのを知る。ルートはバンドを進めば夏の終了テラスに出られそうだが、上がハンクしたバンドは少々難しく、ハーケンとボルトを打ち足してトラバースする。そしてテラスへの登り口に念のため最後のボルトを打とうとしてジャンピングを振るう。手足の感覚が次第になくなっていくのに焦りを覚えながらのボルト打ちは厳しい。最後になってキリが折れ、昨日から続く不運にすっかり落胆する。その上、このまま風雪の中を前穂まで登攀し、三・四のコールまで下降することを考えると、手足の凍傷は増々悪化しそうだ。

セカンドとラストがテラスに達してないので完登したことにはならないが、この時点で登ったルートを下降することに。下の二人にこの旨伝えると二人とも快く承してくれた。

二人が待つテラスまでアプミで下降し、そこから下は四〇°の二Pのアプザイル

ンで取付点に戻った。そのあとB沢までの雪壁はスタカットで下り、B沢に入ってからコンテニューアスでラッセルしながら下降した。三峯リッジの回り込みはやはり末端のクレバス帯を通り、C沢に入ったところでザイルを収納する。

C沢の登り返しは連日の降雪でトレールは跡かたもなく消え、二日前に倍加するラッセルで三・四のコールに戻った。コルで一時間以上かかって雪洞を掘り、長々と体を伸ばしながら凍傷の手当てをする。

### 北尾根下降

六日(風雪) 朝起きてみると雪洞の入口が塞がれている。今日も雪かと思うとうんざりする。予定よりかなり遅れているので、今日は何としても上高地まで下らねばならない。

四峯の下りはスタカット三P、五峯とのコルからはラッセルが深く胸まで埋まる。空罐の残った五・六のコールを過ぎると、再び六峯の丸いビバークまでは深いラッセルとなった。しかし、昨日までのラッセルに比べれば気楽なもので二、三度トップを交替して頂上に着いた。頂上からは嫌な下りが待ち構えているがフィック・スド・ロープに助けられて無事通過。

## 会員募集

- ◎四季を通じ、縦走、岩登り、沢登り、山スキーなどオールラウンドな活動をしています。
- ◎年令25才迄の男女、経験は問いません。
- ◎集会は毎週木曜午後7時より金山駅近くで行っております。あなたも大勢の仲間と共に山へ行ってみませんが、詳細はハガキで

〒460 名古屋市中区金山1の8の23 白水社内

愛知岳連加盟 **新峰登高会**

## 会員募集

あなたの山旅をより深く  
豊かなものに!! 若い仲間  
が待っています。年令・経  
験・性別を問いません。

台東区根岸5-6-14 三浦利雄  
目黒区碑文谷1-24-8 竹内雅

**東京アルコウ会**

七峯のリッジを過ぎるとすぐに八峯への登りとなり、テント村と化している頂上に着いた。ようやく天候が回復し、入山以来初めて太陽が顔を出した。  
八峯からは慶応稜に入り、シリセードでどんどん下って奥又の押出へ降り立つ

た。あとはのんびり徳沢まで歩き、冬季小屋で山行の無事を祝った。  
〔タイム〕三・四のころ(八・〇〇) 八峯(一・三〇) 徳沢(一四・三〇) 上高地(一六・三〇)  
(記・木村 智)

### 《二二六三m 峯東壁中央リッジルート初登攀》

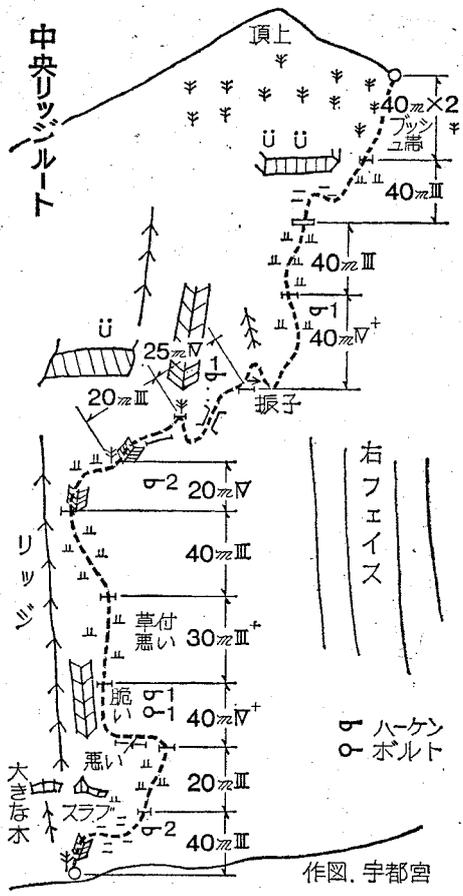
一九七四年七月十九日〜二十日 パーティ 宇都宮行志、桜井宮雄(関山岳会)

十九日 中央リッジと言うのは正面壁の右に落ちているリッジで、下部はハンダグが連続して悪相であるが上部は草付が多い。  
一P目、取付はリッジ末端を右に回り込んだ所の大きなブッシュからであり、

頭上のフェイスを直上するとすぐにハンダグ帯に阻まれて、右手の草付凹角を抜けて小さなブッシュでビレイする。  
二P目、右へ快適なスラブを横断して草付を直上する。三〇P目でピッチを切ったが、ややリッジを右へ外れたようだ。  
三P目、左へかなり悪いバンドトラバースを行い、さらに水の流れているクローアールの右側を、浮き石を次々に落と

しながら直上し、ブッシュに頼ってピッチを切る。このピッチでトラバースにボルト、ハーケンを各一本使用した。  
四P目、急傾斜で今にも抜けそうな草付を必死で登り、やっと一息つけるほどの小さな木でビレイ。  
五P目、やや傾斜の落ちた感じがする草付を左上気味にザイルを伸ばし、ハーケンを一本打ってビレイ。  
六P目、上部ハンダグ帯を避けて右上しているジュードルを登り、大きな木が斜めに倒れているバンド状テラスまで、二〇P目。

て楽な登攀となり、草付帯をザイル一杯で登ると大きなテラスに着いた。時計を見るとすでに八時を回っていて、今日中に稜線へ抜け出ることとはとても出来そうもないのでビバークとする。  
〔タイム〕ワサビ沢出合(八・〇〇) 取付(九・三〇) 一〇・〇〇) B・P(二〇・三〇)  
二十日 昨日は薄暗くてよくわからなかったが、テラス上は一連の大ハンダグ帯になっていて登ることも出来ず、一一P目はハンダグ下を右へトラバースして草付に入る。  
一二P目、草付はしだいにブッシュ混じりとなって、四〇P目で完全なブッシュ帯に入った。事実上の登攀終了点である。ここでザイルを解き、なおも一〇〇Pほどのブッシュ帯を登るとやっと稜線に出た。終了点は頂上のやや右手で、最終的には中央リッジよりかなり右手に出てしまった。



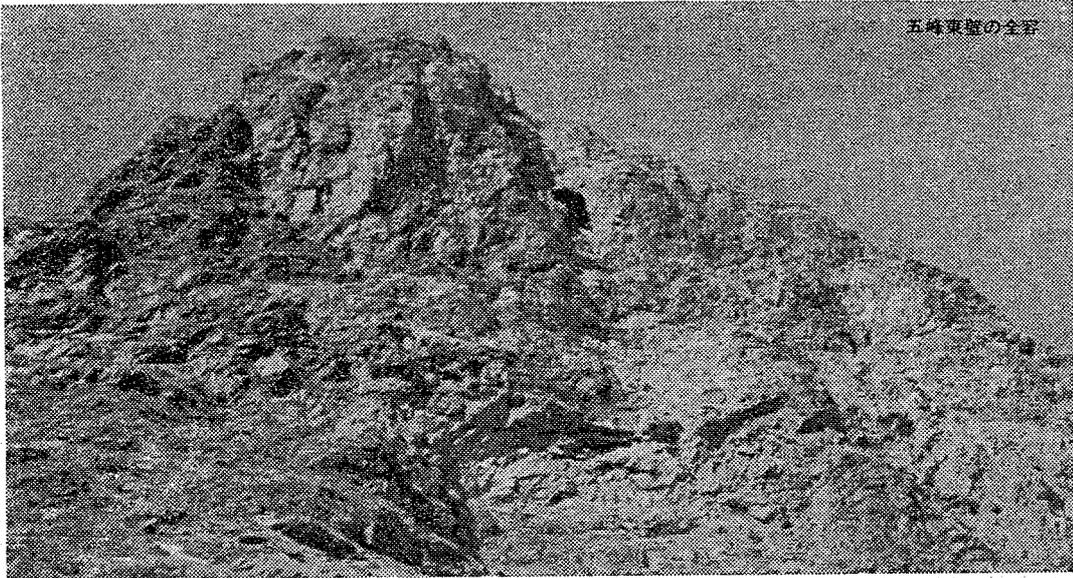
作図 宇都宮

さらに続く草付を登ってブッシュテラスへ。このピッチで古い二本のハーケンを発見した。ノーマルルートからのものであるうか。  
九P目、または現れたブヨブヨの草付を一五Pほど直上し、行き詰まった所よりハーケンを一本打って右手に振子トラバースを試みる。ここは非常に悪く、ようやくのことで草付バンドに上がった。そしてバンド右端より再び草付となり、四〇P一杯でピッチを切る。  
一〇P目、ここからは傾斜が落ち

頂上で正面を登った木村パーティと合流して稜線をそのまま辿り、ワサビ沢とのコルより下降して明神へ下った。  
このルートは脆い壁と草付が交叉していて悪く、ルートの選択には慎重さを要求される。また、安定したテラスが乏しいのでピッチの区切りもうまく行い必要がある。  
〔タイム〕B・P(七・三〇) 頂上(九・〇〇) コル(九・四五) ワサビ沢出合(一三・〇〇)  
(記・宇都宮行志)

# 五峰の岩場-1

登攀倶楽部・岐阜



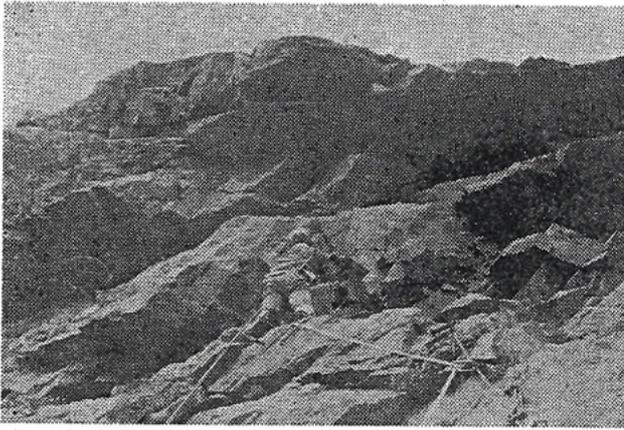
五峰東壁の全景

## △はじめに▽

五峰の岩場は明神岳の中では最も知られ、その困難度と共に穂高の中でも重要な位置を占めている。  
 登攀史的には一九三二年に東大パーティによって東南稜が最も早く登られている。そのほか戦前に登られたルートとしては、同パーティによって中央稜と今日でも第一級のルートとして通用する中央ルンゼ中央リソネ(上部は中央リッペ)が完登されている。戦後になって、まず中央リソネが一九四九年、岩稜会によって完全トレスされ、続いて中央フェイスや南壁が一九六〇年までに岩稜会と東雲山溪会などによって登られた。その後一九六二年に、中央ルンゼ奥壁の右岩溝ルートが登られたのみで、われわれのルート開拓までずっと空白期間が続いていた。理由は明神岳の岩場は滝谷や奥又のように一般化されるにはほど遠いルートばかりであり、前述の両会が開拓に一応のピリオドを打ったことが影響している。われわれの開拓は残されたルートを整理したに過ぎない。しかし中央ルンゼ奥壁のメガネハングダイレクトルートは単独ルート開拓であり、東南カントは明神岳をめぐる諸ルートの中で最も困難で長いルートである。したがってわれわれの登攀は開拓史の一ページを担った登攀といえる。

## △岩場の概要▽

岩場の構成は東南稜と東北稜との間に挟まれた下宮川奥壁、南壁、中央フェイス、中央稜、中央ルンゼ奥壁によって形成されている。岩場のスケールとしては高距三〇〇m、幅四〇〇m程度と思われ、ザイルピッチにすると一〇〜一四P。  
 岩質は中央フェイスと中央稜などが脆く、東南カントや中央リソネなどは思いのほか固い。また、全体として逆層であり、登攀に際してはかなりのフリックライミング技術を要求される。その他夏季の登攀では残置ハーケンが少ないのでルートファイディングが難しく、どのルートも途中に一、二Pは脆いピッチが混じっている。したがって滝谷や奥又の既成ルートを登るようなわけにはいかない。ルート途中からのエスケープは、ハーケン、ボルトの効かない部分もあるのでほとんど不可能と考えた方がよい。  
 冬季登攀ではほとんどのルートがフリックライミングが主体であり、逆層の岩という点もあって非常に難しい。過去の登攀において、どのパーティも最低一回はピバクしていることがそれを物語っている。現在まで冬の登攀が成されていないルートは、東南カント、メガネハングダイレクトルート、右岩溝ルートなどであり、今後の登攀が待たれる。



五峯東壁東南カンのハング帯を登る

## ▲ルートの紹介▼

### 〔アプローチ〕

アプローチは大別すると二つある。一つは養魚場の裏手からそのままダイレクトに下宮川をつめて青草テラスに出る方法。もう一つは宮川のコルを越えてワデ宮川のガレ場から中央ルンゼ、または青草テラスに出る方法。このうち中央ルンゼの奥壁(中央リンネなど)を登る場合は後者に限られる。

には下宮川を詰める方法が簡単で速い。宮川のコルへの道を右に見送って溜池をどんどん越えて行くと、スラブ状の岩場にぶつかる。ここをフリクションで一〇〇分ほど登ると南壁下部壁に突き当たる。ここから右手の草付帯に入り右上するとすぐ宮川尾根に出るが、青草テラスは目と鼻のさき。所要時間一時間三〇分。

養魚場(宮川のコル)ワデ宮川のガラ場(青草テラス)ワデ宮川から青草テラスに登る場合は、中央フェイス下部壁の右端をスタカットで一P登ると青草テラスから続くガレ場に出る。こちらは養魚場から二時間三〇分ぐらいかかる。また

左端の滝状スラブにもルートが開かれたのでここを登るのも面白い。四P、九〇分ほどで登れ一P目を除いては岩は固い。

中央ルンゼ奥壁(アプローチ)として最も速くて厄介なのは中央ルンゼの奥壁を登る場合である。ここは中央ルンゼそのものが登攀の対象となり、脆く逆層の岩と相まって注意を要する。F1~F3までの滝はいずれも左岸(東北稜側)がルートとなる。特にF2などはスタカットで登るべきである。所要時間は養魚場から四、五時間は見ておきたい。

冬季の場合(青草テラスへ出る最も安全なルート)として宮川尾根が挙げられるが、上部が岩場混じりとなっているため時間がかかる。従って

雪の状態が安定していれば下宮川をつめるのが最も近道で速い。また中央ルンゼの奥壁を登る場合は東北稜側斜面の雪崩に最も警戒を要する。

### 〔下宮川奥壁と南壁〕

従来は下宮川のどんづまりにある壁と青草テラスから始まる壁を一緒にしてそう呼んでいたが、ここでは前者を下宮川奥壁、後者を南壁と区分した。

下宮川奥壁(突き当たりの壁から左上気味に東南稜に向かって突き上げているルンゼ状の壁で、意外に固そうである。ザイルピッチで一〇P程度と思われる。また、このルンゼ状の壁と南壁との間に

白っぽいフェイスがあるが、これは上部が非常に脆いルンゼとなっているので落石が激しく、登攀の対象とはならない。

南壁(初登時は下宮川から取りついて左端のチムニーを登っている。この時のルートは不明確で、現在はほとんど青草テラスから登っている。岩場は中間にバンドが走っており、そのバンドを境にして下部は逆層の草付フェイスでやや傾斜が弱い。それに比して上部壁は急で、特に右端付近はハング気味である。また、このバンドは中央フェイスに続いているので、上部を東南カントルートや岩稜会ルートへとつなぐことができる。

ルートとしてはバンドまでの下部に三ルート、上部に二ルートある。このうち下宮川から取りついて左端をほぼ直上し

重いリュックを気軽に置いて……  
新穂高温泉で岳人の気楽に泊れる宿  
7月1日新装オープン 山の宿

北アルプス展望の大露天風呂

岐阜県吉城郡上宝村新穂高温泉口 TEL 05789-2733・2069  
新穂高温泉バス停前(穂高岳山荘無線連絡事務所)

# 五峰東南面概念図



- ① 下部ノーマルルート
- ② 南壁
- ③ 東南カンテルート
- ④ 岩稜会ルート
- ⑤ 東雲ルート
- ⑥ 中央稜
- ⑦ 中央リンネ
- ⑧ 右岩溝ルート
- ⑨ メガネハングダイレクトルート

ているのがノーマルルートで、ピッチ数にして一〇P前後と思われる。詳細については登攀経験がないので書くことはできない。

その他のルートとしては、青草テラスから始まる、右ルートと左ルートがある。右ルートは中央フェイスとの境目となっているカンテの左から取りつき、逆層の草付フェイスを三P、約一〇〇m登ると枯れた木のあるバンドに達する。ピッチグレードは三〜四級ぐらい。

左ルートは青草テラスの左端の大きなハングを左から回り込み、凹角状のころをやや右上気味に三P登ると前述の枯

木に出て両ルートは合流する。上部壁は枯木の左約二〇mの所へ落ちて凹角状のルートがノーマルルートで、南壁の頭まで四P程度と思われる。またトラバースルートは東南カンテまでが四〇m、さらに中央フェイスまではガリーとカンテ状を横断して三〇mで岩稜会ルートと合する。

今後南壁にルートを開拓しようとすれば、東南カンテノーマルルート間に広がる垂壁とカンテが目標となろう。いずれも人工となりそうで、南壁の頭まで三〜四Pのルートだろう。

## 〔中央フェイス〕

中央フェイスは南壁との間のカンテ(東南カンテ)から中央稜までの幅二〇mほどのフェイスをいう。

岩場の特徴としては、左右にガリーが深く切れ込んでいること。特に左のガリーは南壁の頭まで突き上げているし、壁の傾斜は下部と上部が強く中間部はやや弱い。代表的なルートとしては、左から東南カンテ、岩稜会ルート、東雲ルートの三ルートで、他ルートは詳細不明というところもあってか現在ではほとんど登られていない。ここではこの三ルートについて簡単に説明したい。

東南カンテはワテ宮川から取りついて下部壁左端のルンゼ状スラブを直登し青草テラスに達する。ルートは岩稜会ルートの左、約三〇mにある逆層スラブから始まる。このピッチをフリーで登るとハング帯に阻まれ、これをボルトとハーケンで突破すると垂壁に出てアブミピレィとなる。ここからは徐々に傾斜が落ち、二Pで南壁バンドの右端に出るがバンド手前の一Pが脆い。青草テラスからここまで五P。

バンドからは再び傾斜が強くなってほとんどカンテ通しの登攀となる。三Pの人工とフリーのミックスしたピッチを登ると大きなバンド状テラスに出る。ここからは右手から上がってきているガリーに入り四〇m左左上すると南壁の頭に達

する。稜線までは一P、二〇m登るだけである。

下部壁は四P、上部壁は一〇Pの登攀で、所要時間は五〜七時間。ルートグレード五級上。

岩稜会ルートは取付はやはり青草テラスからで、岩壁のほぼ中央を直上するルートである。

ガリー一Pとフェイス一Pでハングに突き当たる。これをやや左に回り込んでハングの切れ目をアブミで越えてガリーに入り、そのまま二P辿ると赤い垂壁直下のバンドに出る。この地点からルートは二方向に分かれる。初登ルートは左上気味に草付フェイスを登って再びガリーに入り、大洞穴に達している。この洞穴は左壁から上部を右にトラバースし、中央稜上部へ抜けている。ただし、最近は大洞穴付近がかなり崩壊しているため正規ルートの登攀は不可能だろう。

私が経験しているルートはバンドから右上気味にカンテを越え、脆いバンドを右にトラバースして赤いピナクルに出て、さらに凹状のフェイスをフリクシオンで登って中央稜へ達するルートである。バンドからは三Pで登ってこられる。

青草テラスからは八Pの登攀で、所要時間は三〜五時間。ルートグレード四級上。

東雲ルートはこのルートは中央稜寄りにS字模様になって登るルートで、別名S字ルートとも呼ばれている。

青草テラスから右端の浅いガリーを上すると三Pで脆いハング帯に突き当たると、ここは右に回り込んでいったん中央稜に出て、ハングを回り込んで左へトラバースしてガリーに入れば容易である。直登は岩が脆くて非常に難しい登攀となり、ハング気味のフェイスからバンドを右へ出ると前述のルート(岩稜会ルート)とぶつかる。ハング上からはガリー、チムニーを登ると再び垂壁帯に阻まれる。この地点からは直上するルートもあるようだが、左へカントを回り込むと岩稜会ルートと合流して中央バンドに達する。以後は前述の右とするルートに入れば三Pで終了。

青草テラスから合計一〇Pの登攀。所要時間は四〜五時間。ルートグレード四級上。

〔中央稜〕

このルートは中央フェイスの右稜ともいべきルートで、中間部がカント状で下部と上部は幅広い草付フェイスとなっている。

草付と脆い逆層のフェイスとで構成されているのでルートファインディングを誤ると非常に困難な登攀となる。所要時間は二〜三時間。

〔中央ルンゼ奥壁〕

中央ルンゼの奥壁は、カールボーデンと呼ばれる中間の台地から上部に位置し

ているルートを呼んでいる。この中で中央ルンネが最も早くから登られ親しまれている。

中央ルンネ中央ルンネの取付に至るには、F1〜F3を経てカールボーデンに達し、さらに左上に登るとルンネ入口の取付テラスに着く。ルートはほとんどルンネ内にとられていて、部分的に脆い場所もあるがフリークライミングの登攀となる。三P目で洞穴が現れこれは左へ巻く。またここから右へトラバースして中央リッペに移ることもできる。洞穴を越えて左上するバンドを辿ると岩稜会テラスに出る。

ここから再びルンネ内に戻ってチムニーを登り、非常に脆いバンドを右にトラバースするとテラスである。さらに左上にルートを求めてフェイスから最後はクラックを抜けると頂上近くの稜線に達する。

取付からは七〜八Pで所要時間は四〜六時間(中央ルンゼ入口より)。ルートグレード四級上。

右岩溝ルート取付はメガネハングの左で、最初のピッチは中央リッペ側を登り、二P目から右手にトラバースして岩溝へ達している。岩溝は四Pで終わり、さらに草付二Pで東北稜の頭近くに出るルートである。

ザイルピッチは八P前後と思われるが、詳細は未経験のルートなので不明。初登パーティーは約七時間で完登しているよう

である。

メガネハングダイレクトルートとして開拓されたもので、カールボーデンが取付である。

ルートは一P目で四段から成るメガネ状ハングの中央部を越え、続く二P目からフリーとなって凹角二Pとフェイス二Pで右岩溝ルートの洞穴に達し、さらに一Pで東北稜の頭に出て登攀は終了である。

なおこのルートはまだ夏季第二登が成されていないと思われるし、もちろん冬季も登られていない。

〔その他のルート〕

岩壁以外のルートとしては東南稜と東北稜がある。

東南稜は完全に冬のルートといつてよく、夏はブッシュが多くて快適なルートとはいえない。取付は養魚場の裏手から直接取りつくものと、下宮川を途中まで登ってから尾根にトラバースする方法の二つがある。

東北稜は通常、F2付近の草付を登って稜線に出るものである。これも夏季には草付と脆い岩とでいやらしいルートであり、初登時がそうであったように、五月ごろの残雪期に登るのが一番よいと思われる。

(記・木村 智)

澄んだ空気 さわやかな信州  
山は八ヶ岳連峰

赤岳鉱泉 直通電話 (02667) 2-3939  
連絡先 長野県茅野市泉野191柳沢国一  
☎ (02667) 9-3385



赤岳鉱泉八ヶ岳行者小屋

朝東京を発てばその日の中に鉱泉へ到着できます。  
バスは冬期も美濃戸口まで入りますのでご安心です。